

---

# IS 銀の姫とサーヴァント

黒翼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS 銀の姫とサーヴァント

### 【Zコード】

Z2508Z

### 【作者名】

黒翼

### 【あらすじ】

銀の姫は幼き頃の白き騎士に救われた。  
だが、無常にも別れが訪れてしまった。  
そして、かつてとは変わり果てた世界で再開する。  
設定が甘かつたり、チートだつたりします。  
そして、サーヴァントたちはFateとは違う性格だつたりします。  
それらが嫌な方はバックで。

## プロローグ（前書き）

また始めてしまった……。

## プロローグ

それはずっと昔のことだった。

「一緒に遊ぼうよー。」

「え？」

私は元々髪の色は黒い、ブラウンだった。  
しかし、あるとき突然髪の色が変色し、銀髪になってしまった。  
その所為か、一緒に遊んでいた子達が奇妙がつて私から離れていった。

だから、私は一人でいた。

そんな私に声を掛けてくれてのが彼だった。

「君も一緒に遊ぼうよー。」

「え、でも……」

「遊ぼう、ね？」

そんな私に明るい笑顔で話しかけてくれた。  
私は嬉しかった。

「う、うんー。」

一人だった私に、寂しかった私に声を掛けてくれた、彼が好きだった。

でも、私の両親は、あまりにも過保護だった。

幼稚園でこれだ、小学校ではもつと酷いかもしれない。

そういう考えを持つてしまつたいたが故に、私と海外に移住することになった。

実家のあるドイツに行くことになってしまったのだ。

「一君……」

「ウソニアちゃん、また会おうねー。」

「う、うん、また……。私のこと、忘れないでね……？」

「もちろんー、絶対に忘れないー！」

「またね、一君。お姉さんとも会つておこへね

「うんー。」

これが、私と彼の別れだった。

『世界で唯一のIIS操縦者・織斑一夏』

実家の城（誤字在らず）でテレビを見ていて、私『ウリアスフィール・フォン・アインツベルン』は果然とした。

祖父の命令でIIS学園に行くことが決まっていた私は運命を感じた。彼の姉は一年ほどドイツ軍に來ていたため、再開したときは驚かれた。

彼女は私の立場に驚いた。

私は、ドイツのみならず、様々な国に大きな権力を持つアインツベルン家の次期当主で、アインツベルンの企業の企業代表操縦者になっていた。

元々、アインツベルンは貴族だった。

それ以外に、鍊金術が使える。

私も使えるが、流石に治癒まではすることができない。

「一君、覚えているかな……」

『彼がウリアスフィールの言つていた人ですか』

「うん。 私の恩人で、私の初恋の相手。 今もそれは続いているんだけどね」

『写真で見る感じはいい男だな』

「幼稚園のころは凄く優しくて、明るい人だったよ」

『それは今でも変わらぬといいがな』

『きっと一君は今でもいい人だよ』

『そつであると願いましょ』

「うん。 早く会いたいな……」

私は、早くE.S学園に入学したい、早く一君に会いたい、そういう欲求が生まれてきた。

## 再開

「全員揃つてますねー。 それじゃあJHRを始めますよー」

『子供が無理して大人の服を着ました』的な不自然さを持つている。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願ひしますね」

「…………」

誰も答えません。

原因は、ここにいる唯一の男性で、私の初恋の相手の織斑一夏。  
唯一の男性であるが故に、クラスの視線は全て彼に向けられている。  
私も見ているんですけどね、だって一君とつても格好よくなってる  
んだもの。

「じゃ、じゃあ血口紹介をお願いします。 えっと、出席番号順で」

あ、私ですね。

「ウリアスファイール・フォン・アインツベルンです。 よろしくお願ひします」

「私は気づいてくれるかな？」

「君は今この空気に飲まれちゃってるから気づかないかな？  
後で話しかければいいか

## Side～一夏～

キツイ、これは想像以上にキツイ！

男が俺だけってこれだけ視線を集めるものだな。

「……くん。織斑一夏君？」

「は、はいっ！」

いきなり大声で名前を呼ばれたので思わず声が裏返ってしまった。案の定、くすくすと笑い声が聞こえてきた。

「あつ、あの、お、大声出しちゃって』めんなさい。お、怒つてる？ 怒ってるかな？『ゴメンね、ゴメンね！ でもね、あのね、自己紹介』あ』から始まつて今『お』の織斑君なんだよね。だからね、『』、ゴメンね？ 自己紹介してくれるかな？ だ、駄目かな？」

？」

山田先生はペー♪ペー♪と頭を下げる。

この人、本当に先生なのだろうか？

「いや、あの、そんなに謝らなくとも……つていうか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当ですか？ 本当ですね？ や、約束ですよ。絶対です  
よー」

俺の手をとり詰め寄る先生。  
凄い注目されるんですけど……。  
うわ、すっげー視線。

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしくお願ひします」

『もつと喋つてよ』と言つ空氣が流れている。  
だが、話すことが何も無い。

しばらく考えたが何も無い。

助けを求めて幼馴染の篠を見るが、目をそらされた。  
あ、あれ？

あの子、もしかして……。  
いや、まさかな。

つと自己紹介の最中だつたな。

「……以上です」

女子数名がずつこけるが、俺ことつてしまひでもいい。  
彼女があの子なのかが気になって仕方が無い。  
む！ 殺氣！

パシッ！

この攻撃の鋭さ、間違いない！

「ほつ、防ぐか」

黒スーツにタイトスカート、すらりとした長身、狼を思わせる鋭い  
つり目。

間違いない。

俺の実姉なのが、職業不詳で月一、二回しか家に帰つてこないの  
だ。  
だけどなんでここに？

「……やつぱり千冬姉だったか」

パシッ！

「織斑先生と呼べ。 馬鹿者」

もう一度出席簿が振り下ろされるが、それをも防ぐ。  
俺だって鍛えているんだ、それがこんなところで役立つとは。

「あ、織斑先生、もう会議は終わられたのですか？」

「ああ、山田君、クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな

俺は聞いた事のない優しい声だ。

「い、いえっ。 副担任としてこれくらいはしないと……」

山田先生は若干熱っぽくなつた。

そつちの氣があるわけではないよな？

「諸君、私が織斑千冬だ。 これから一年間で君達を使い物にする  
のが私の仕事だ。 私の言つ事はよく聞き、よく理解しろ。 理解  
出来ない者は出来るまで指導してやる。 私の仕事は弱冠15歳を  
16歳までに鍛え抜くことだ。 逆らつても良いが、私の言つ事は  
聞け、いいな」

なんといつ暴力発言。

教師有るまじき発言だと思つぞ、我が実姉織斑千冬よ。

……何のキャラだ、コレ？

「キヤー————！ 千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園から來たんです！ 北九州から！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて、嬉しいです！」

「私、お姉様の為なら死ねます！」

キャアキャア騒ぐ女子達を、千冬姉はうつとうしそうな顔で見ている。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者共が集まるものだ。 感心せられる。 それとも何か？ 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

人気は買えないんだから、もつもつと優しくしようぜ？

「あやあああああっ！ お姉様！ もつと見て！ 罷つて！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないようになまきをして～！」

このクラスは変態さんが多いのか？

ノーマルだよな？ ノーマルもいるといつてくれ！

「で？ おまえは挨拶も満足にできんのか、お前は

「いや、千冬姉、俺は

「

パシッ！

本日3度目。

俺、止めてなかつたらもう脳細胞が一万五千個死んでるぞ？

「織斑先生と呼べ」

「了解です、織斑先生」

俺と千冬姉が姉弟なのがばれた。

「え……？ 織斑君って、あの千冬様の弟……？」

「それじゃ世界で男で『 HIS』が使えるって言つのもそれが関係して……」

「ああっ、いいなあっ。代わってほしいなあっ」

最後のは放つておいつ。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれから基礎知識を半月で覚えてもらひ。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませる。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

なんという鬼教官だ。

「席に着け、馬鹿者」

馬鹿で結構。

S i d e s — 夏 — o u t

S i d e s — ウリア —

一夏、強くなつてゐるみたい。

あの千冬さんの攻撃をああも防ぐなんて。

^ますます惚れましたか？^

^うん。『眞で見るよりもずっと格好いいしね』

^その恋が実るといいな^

^うん。覚えているかな？^

あ、彼らはアインツベルンが創つた私の専用機『サーヴァント』の  
人格たち。

アインツベルンが過去に召喚した英靈たちらしい。  
神話に出てきた英靈たちの力を貸してもらひ「」とができるのが、私  
のI.Sの強みなんだ。

キーンゴーンカーンゴーン。

あ、一時間目が終わつた。

一君はダウンしていた。

大丈夫かな？

^主よ、話しかけなくともいいのか？^

^あ、そうだつた^

私は席を立ち、一君の席に行く。

「ちょっとこいかな？」

私以外にもう一人、一君に話しかけようとしていた子がいたけど、私は確かめずにはいられない。

「はい？ ……（ガタツ！）」

一君は私を見ると驚いて席を立つた。  
周りは何事かと見てるけど、気にしない。

「覚えてる……かな？」

「ウリア、なのか……？」

「うん。久しづりだね、一君」

「本当に、ウリア……なんだな？」

「そうだよ。幼稚園のころに別れた、ウリアスフィール・フォン・  
AINZBERGだよ」

「久しぶり、ウリア。俺、ずっと覚えていたぞ。ウリアと別れ  
てから十年間、ずっと」

「うん……私もずっと忘れなかつた……」

よかつた、一君が私のことを覚えていてくれて……。  
涙が出てきたよ。

「お、おい、どうした？」

「嬉しくて涙が……」

「そんなに嬉しいのか？ 僕も嬉しいけど……」

だって私の好きな人なんだんもん！

覚えてもらえて嬉しくないわけないでしょー！

「おめでとうございます、ウリアスフィール！」

「まだ早いぞ、アルトリアよ。 それはウリアの恋が実つてから言うべき台詞だとは思わないかね？」

「ほひ、わかつてゐるではないか！」

「イスカンダル、私は鈍感であったが、それは過去の話だぞ。 それに、流石にそれくらいは俺でもわかる！」

「一番新しい英靈が言ひではないか！」

「無駄な言い争いをするな。 我らは主に仕えるだけであつた！」

「間違つていいぞ、ディルムッシュよ。 余は仕えてはおらぬ。 この契約は余たちの気分次第だ！」

「イスカンダルの言ひとおりだ。 現にギルガメッシュは現界しているが、力を貸すことは滅多にない！」

「やういえばそうだつたな！」

このエスに宿る英靈たちの中で最も強い力を持つギルガメッシュは、滅多なことがない（ていうか、一回くらいしか使ったことが無い）と力を貸してくれないから困る。

『<sup>オレ</sup>我的宝物をそう簡単に使おうとは片腹痛い』とか言つから、ギルガメッシュはほとんど使えず仕舞い。

人類最古の英雄王はいつになつたら私にちゃんと力を貸してくれるのだろうか？

「これからもよろしくね、一君」

「ああ、よろしく。あと、一夏でいいぞ」

「今はまだ一君のほうがいいから」のまま

「そうか」

キーンゴーンカーンゴーン。

「時間みたいだから、また次の時間にね」

「おう」

私と一君の繋がりが切れて無くてよかつた。

## 再開（後書き）

「出した英靈たちは、なんとなくです。  
後、原作読んでないから英靈たちの口調がわからない…。」

「そんなので大丈夫なんでしょう?」

「問題ないと信じている…」

「…こんな駄作者ですが、応援してあげてくださいね」

「ウリアあー?」

## 設定（12月17日更新）（前書き）

一応投稿します。  
が、設定が甘いです。  
(誕生日を追加しました)

## 設定（12月17日更新）

### 【名前】

ウリアスフィール・フォン・アインツベルン

### 【見た目】

Fat eのアイリヒイリヤを足して「ド割ったような感じ。  
元々はブラウンの髪に赤い目だが、なぜか急に銀（白？）髪に変わ  
つた。

### 【設定】

幼稚園時代は日本にいたが、突然の髪色変化により起きた周囲の反  
応と、あまりにも過保護すぎた両親の所為でドイツに移住した。  
アインツベルン家の次期当主で、アインツベルンの持つ企業の企業  
代表でもある。

アインツベルンの秘奥である鍊金術を覚えていたが、治療術はまだ  
できない。

一夏のことがずっと好きで、一途である。

誕生日は6月15日である。

### 【専用機名】

サーヴァント

### 【設定】

アインツベルンが創り上げたIS。

アインツベルンが呼び出した英雄たちの『英靈』たちが宿り、そ  
の英靈の気分次第で力を貸すという、変わった性質を持つ変わった  
IS。

元々のカラーは雪のような白で、英靈の使用した武器『宝具』も使

えるが、真の力は使えない。

『宝具』の真の力を使うのは簡単で、英靈とE.Sを共有するること（共有時はE.Sの格好が変化する）。

ただし、その英靈が拒めば使えない。

しかし、その中にもいろいろと例外が存在したりする。

### 【織斑一夏について】

一夏の戦闘能力は高く、剣道にて、筈では相手にならないほどに強い。

## 宣戰布告（前書き）

最後を一部修正しました。

## 宣戦布告

(一君、どうしたのでしょうか?)

一時間目。

一君が拳動不審でいた。

^\ 内容がわからないのでは? ^

(あ、それかも)

^\ 忙り忙しの勉強をし始めたのは長くても一ヶ月前。十分頷ける

^\ 何かしらのアクシデントがあるかもしねい ^

(それだね。何かの手違いがあつて捨ててしまったのかもしませんし)

^\ まあ、今は見回さるべからずあります

(うん)

私は一夏を見回ることにした。

「先生ー。」

「はー、織斑君ー。」

「ほとんど全部わかりません」

え？

「え……。 ゼ、全部ですか……？」

一君、本当に何してたんですか？

「え、えっと……織斑君以外で、今の段階でわからないうつていう人はどれくらいいますか？」

誰も手を上げない。

「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

パンツ！

今度は防がない一君。

自分が悪いのは自覚しているようだ。  
それにも、本当に捨ててしまつたとは……。

「必読と書いてあつただろうが馬鹿者。 あとで再発行してやるから一週間以内に覚えろ。 いいな」

「い、いや、一週間での分厚さはちょっと……」

「やれと言つている」

「……はい。 やります」

よし、教えよう。

私は一君のためならなんでもするつもりだし、そもそも他の子なんかに一君を渡してたまるものですか。

「一君、大丈夫？」

「大丈夫じゃない。 せっぱりわかんねえ」

「それは仕方ないよ。 だつてここに来る子はちゃんと勉強してきてるんだし、ISUに全く関係の無かつたんだから、それはこれから挽回しよう。 私も手伝つから、ね？」

あれ？

一君に皿を逸らされちゃいました。

「あ、ああ。 よりしく頼むよ」

「……おひとつと「おひとつよろしくて？」……」

「へ？」

「はい？」

声を掛けたのは黒髪ボニー・テールの子と、金髪ロールの子。全く、一君と私の時間を邪魔しないでください。

「訊いてます？ お返事は？」

「あ、ああ。 訊いているけど……どういう用件だ？」

「まあ！ なんですの、そのお返事。 わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

「悪いな。 僕、君が誰か知らないし」

「私もです」

「わたくしを知らない？」このセシリ亞・オルコットを？ イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを…？」

「あ、質問いいか？」

「ふん。 下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。 よろしくてよ」

「代表候補生って、何？」

「ここまで無知でしたか……。

周りの子達がずっとこけてますよ。

「一君、代表候補生と言つるのは国家代表INS操縦者の候補生のことだよ。 単語からもわかるよ」

「そりゃー、つまりエリートなのですわー！」

「君に指を指さないでください。」

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすことだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただけれる？」

「そうか。 それはラッキーだ」

「……馬鹿にしてますの？」

「あなたが幸運って言つたんじゃないですか。  
私と一君が再会できたことのほうが幸運です。」

「大体、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入りましたわね。 唯一男でISを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的を感じさせるかと思つていましたけど、期待はずれですわ」

「俺に期待されても困るんだが」

「一君のことを知らない人が評価をしないでください。 そんな下らない価値観を持つてているから世界が歪むんです」

「なんですか？」

「貴女が偶々学年主席で、イギリスの代表候補生なだけで一君を下に見ないでください。 貴女よりも一君のほうがよっぽどか世間に

誇れます

「貴女、私を侮辱するんですの？」

「貴女が先に一君を侮辱したんじゃないですか。私は一君を知らないのに侮辱する貴女が嫌いです。これなら入試を受けておくべきでした……」

「貴女、今なんと？」

「入試を受けておけばよかつたといつてているんです。私が主席であれば、貴女を罵つてもいいですよ？ 貴女が一君を罵ったようにね」

「貴女、入試を受けなかつたんですのー？」

「はい。御爺様曰く、やるだけ無駄と」

次期当主たるもの、代表候補生に負けてはいけないんです。

「あ、そういうえば一君、入試はどうでした？」

「あーあれか？ ＩＳを動かす奴だろ？」

「そうですよ」

「あれ、俺も倒したぞ」

「へえ、流石ですね」

「わ、わたくしじだけと聞きましたが？」

「女子ではなくオチじゃないのか？」

「つ、つまり、わたくしじだけではないと……？」

「いや、知らないけどさうだら。俺も一応倒したし」

「自信過剰ですね。 滑稽です」

「一応ひじりうごいとですのーー？」

キーンゴーンカーンゴーン。

「う…………！ またあとで来ますわー！ よくつてーー？」

よくありません。

あ、そういうえば黒髪ボニー・テールはどうしたのでしょうか？

まあ、気にしなくても大丈夫でしょう。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

織斑先生が思い出したように言いました。  
私は遠慮しておきました。

「クラス代表とはそのままの意味だ。 対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。 ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。 今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。 一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

「はいっ。 織斑君を推薦します！」

「私もそれがいいと思つますー！」

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？ 自薦他薦は問わんぞ」

「お、俺！？」

私も一君で賛成です。

私は出るわけには行きませんしね。

一君がクラス代表になれば、鍛えると言つて一緒にれますし。

「織斑。 席に着け、邪魔だ。 さて、他にいないのか？ いないなら締め切るぞ」

「ちよつ、ちよつと待つた！ 僕はそんなのやらない。

「自薦他薦は問わないといった。 他薦されたものに拒否権などない。 選ばれた以上は覚悟をしよう」

「い、いやでも

「

バンッ！

「待つてください！ 納得がいきませんわ！」

……また貴女ですか。

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリ亞・オルセットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

……。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。 それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国までE.S技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

……。

「いいですか！？ クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

貴女がトップ、ね……。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけない自体、わたくしにとって耐え難い苦痛で」

「

「イギリスだつて大してお国自慢ないだろ。 世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「ただの古こだけの国に何があるんですか？」

「君が怒るのはわかります。  
ですが、私も我慢なりません。」

「あつ、あつ、あなたがた！ わたくしの祖国を侮辱しますのー？」

「先に日本を侮辱したのは貴女ですよ。私はこの国が好きなんです。『もし』一君の侮辱をもする貴女は『氣に入らない』

「あ、あなた、一度までなり『一度』でも……！」

「そもそも、日本で暮らすのが苦痛ならば國に帰ればいいではないですか。誰も貴女を止めませんよ？」

「け、決闘ですわ！」

「いいでしょ。 貴女のその血信、粉々にしてあげます」

「ウリアスファイールが怒っています……」

「ほつ、面白そつだな」

「ギルガメッシュ！？」

「ここまで切れたのは中々無いではないか。 あの雑種がどのようにしてウリアにせりられるか、見物ではないか！」

「あそこまで怒っているのは初めてではあるが……」

「あのウリアが怒つてゐるのだぞ？ これ以上ない余興ではないか」

英靈たちが何か言つてますね。

「さて、ハンデはどれほど付けましょつか？」

「貴女、私をどれだけ下に見れば………」

「オルコット、悪い」とは言わん。ハンデを付けてもらえ。お前では確實に負けるだ。あいつはあのアインツベルンの次期当主だぞ」

「なー？」

アインツベルンは何かしらで秀でていないとならない。  
私は頑張つてあらゆることを覚えましたからね。

御爺様曰く、歴代最強になれるとのこと。

「先生、勝手にばらさないでくださいよ。まあ、いいです。この際言つておきましょう。アインツベルン家次期当主兼企業代表のウリアスファイール・フォン・アインツベルンです。以後、お見知りおきを」

「では、勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。アインツベルンとオルコット、その後、その勝者と織斑の試合だ。それ準備をしておくよ」

「俺もなのか！？」

「アインツベルンはそもそも立候補も推薦もされていない。これ

がクラス代表を決めるものだとされるな。では、授業を始める

(どうやってあの子を潰しましょつか……、強すぎるのは宝具ではありますね)

けないですしつ……)

「では、私ならどうかね?」

(シロウ? あ、やうですね。投影と『壊れた幻想』ブローカン・ファンタズムならじわじわとされますね)

「それじゃ」とだ。 私なら君の壁壇を果たせると頼りがだしがだしがね

(やうですね。あの子にはシロウの力を使わせてもらいますね)

かくして、試合は考へたので、一筋を助けてましょつか。

宣戦布告（後書き）

「ウリアは一夏のことになると人格が変わります」

「一君を侮辱するなら、それが誰であろうと許しません……」

「わあー黒いオーラが見えるよー」

## Side～一夏～

放課後、俺は机の上でぐったりとしていた。ウリアに教えてもらおうとしたけど、用があるみたいで駄目だった。にしても、ここにウリアがいるなんて未だに信じられないな。昔も可愛かつたけど、もつと可愛くなつてたし……って何考へてるんだ、俺は！？

「ああ、織斑君。まだ教室にいたんですね。よかつたです」

「は、はい？」

いかんいかん。

あと少し遅かつたらもつと酷く動搖しただろ？

「えつとですね、寮の部屋割りが決まりました」

そういつて部屋番号の書かれた紙とキーを渡す山田先生。

「俺の部屋つて決まつてないんじゃなかつたですか？ 前に聞いた話だと、一週間は自宅から通学してもらうつて話でしたけど」

「やつなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを無理やり変更したらしいです。政府特例もあって、とにかく寮に入れることを最優先にしたみたいですね。一ヶ月もすれば別の部屋が用意できるので、しばらく我慢してください」

「わかりました。でも、一回家に帰らないと荷物を準備できないので、もつ帰つていいですか？」

「あ、いえ、荷物なら」

「私が手配しておいてやつた。ありがたく思え」

あー千冬姉か。

どうせ生活必需品しか持つて来てないだらうな。  
やっぱ一回帰らないと駄目だな。

「生活必需品と、一応あれも持つてきておいたぞ」

「本当か？ 千冬姉！」

パシッ！

「織斑先生と呼べ」

危ない危ない。

危うく食らうといひだつた。

「ありがとうございます。これで帰らなくて済む……」

あれとは、まあ木刀と真剣とかなんだが、俺が鍛えるときによつて  
いるものだ。

あれがないとやり辛いんだよな。

「じゃあ、時間を見て部屋に行つてくださいね。夕食は六時から  
七時、寮の一年生用食堂でとつてください。ちなみに各部屋には

シャワーもありますけど、大浴場もあります。学年」と使える時間が違いますけど……えっと織斑君達は今のところ使えません

「え、なんですか?」

俺、風呂大好きなんだが……。

「あほかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか?」

「あー……

なるほど、そういうえば俺しか男いないんだった。

「おっ、織斑君つ、女子とお風呂はいりたいんですけど!? だつ、ダメですよー!」

「い、いや、入りたくないです」

ウリアとだつたら……って、何考てるんだよ、俺は!

「ええつ? 女の子に興味が無いんですか! ? そ、それはそれで問題のようにな……」

「よひなじやなくて普通に問題です。それと、俺はノーマルです。

同性愛者ではありません

俺はずつとウリアが好きなんだよ。

それもあったから、ずっと覚えていたんだ。

「えつと、それじゃ私達は会議があるので、これで。織斑君達、ちゃんと寮に帰るんですよ。道草くつちやダメですよ」

確か、校舎から寮まで50メートルくらいしかなかつたはずだ。  
ビリやれば道草をくえるんだ?

「さて、部屋に行こう。……」

この女子たちの針の筵から開放されるなり、まだ部屋で他の女子一人のほうがまだマシだ、多分。

「1025……いいだな」

俺は鍵を差し込む。

あれ、開いてる?

部屋に入ると大きめのベッドが一つ並んでおり、まるでホテルの一室みたいだった。

とりあえず荷物を床に置いて、ベッドにダイブする。  
すっげえもふもふしてる。

「誰かいるんですか?」

奥のほうから声が聞こえた。

「あ、同室になつた人ですか。こんな格好ですみません。私は

」

「ウリア」

シャワー室から出でてきたのは十年ぶりに再会した白銀の美少女、ウリアだつた。

そのウリアの格好は、バスタオルを一枚巻いただけであつた。

白銀の髪に白い肌が映え、とても綺麗に見えた。

「……え？」

Side～ウリア～

「……え？」

私がシャワーを浴びて出ると、一君がいた。

「い、い、一君……？」

「お、おう」

私の今の格好を思い出す。

シャワーを浴びた分で、バスタオルを一枚巻いただけ。

「きもつー。」

「わ、悪いー。」

咄嗟に手で胸元を隠してしまへる。

一君は後ろを向いてくれた。

「な、何で一君がこの部屋に……？」

「な、なんかこじが俺の部屋みたいでな」

「や、そりなの……？」

「い、これがその紙

一君が顔を背けたまま紙を見せてくれる。  
紙には1025と書いてあつた。

「……本当みたい……」

「お、俺はじつすればこいつ

「そ、そのままお願いー！」

「わ、わかったー！」

私は急いでシャワー室に入り、手早く着替える。

「み、見られちゃった……。まだ心臓バクバクだよ……」

いくら好きな人と言えど、全く予想してなかつたのでビックリしてしまつた。

「ふう……よしつー。」

私は深呼吸をしてからシャワー室を出る。

「もういいよ」

「お、おう」

「え、えっと、その……」

何を話したらいいのかな……。

「久しぶり、ウリア」

「あ、うん、久しぶり。十年ぶりだね」

「今まで何してたんだ?」

「ドイツの方の学校に行ってたんだ。 実家を継ぐためにもうやつてたよ」

「へえ、やうなんだ」

「一君は?」

「俺はひたすらに鍛えていたな」

「みたいだね。 千冬さんの攻撃を何度も防いでいたからわかつた  
よ」

普通避けるのも防ぐのも無理だと思つただよね。

「そういえば、君、あの黒髪ボニー・テールの女の子と知り合って？」

「もしかして篠の」とか？

「篠？」

「篠ノ之篠つて言つて、小学校のときに知り合つたんだ

「篠ノ之？ 篠ノ之つてあの篠ノ之？」

「そうだぜ。 篠は篠ノ之東さんの妹なんだ」

「あの人の中ですか」

「知つてるのか？」

「なんどか実家に来たことがあるんですね」

「マジかよ。 あの人、今どこにいるかわからないんだよな」

ISを開発した篠ノ之東博士は現在行方不明なんですけど、なぜか実家に来るんですね。

ふと気づいたら侵入されたこともありますし。

「あ、あの……一樹」

「ん? なんだ?」

「一樹って、付き合つてゐる人か、好きな人つてありますか?」

「ずっと気になつていたんです。」

「ふう! い、こきなり何を言つんだ! 」

「気になつたんですね! 十年の間、やつこつ子がいてもおかしくないでし……」

「……泣き合ひしる子はこないけど、好きな子ならこなよ」

「…そり、ですか……」

やつぱりいたんですね。  
ちよつと残念です……。  
でも、その分頑張らないと!」

「あやつー、い、一君?」

「君に抱き寄せられました。  
な、ななんで! ?」

「俺が好きなのはお前だよ、ウソア」

「え? 今、なんて……?」

「俺が好きなのはお前なんだ。ウリアと別れてからの十年間、ずっとお前のことが好きだった」

「君は私のことが、好き？」

十年前からずっと？

「お、おこ、どうしたんだ？ もしかして、嫌だつたか？ そうだよな、好きでもない男に抱き寄せられたら泣きたくもなるよな……」

私の目からは自然と涙が溢れてきていた。

「ち、違うよ、一君。嬉しいんだよ」

「う、嬉しい？」

「私も、ずっと一君のことが好きだつたんだ。そしたら一君が……」

…

「そうか……、よかつたあ。嫌われたんじゃないかつて思つて冷や冷やしたぜ」

「でも、私でいいの？ 十年ぶりなんだよ？」

「当たり前だ。そういうウリアだつて十年ぶりじゃないか。本当に俺なんかでいいのか？」

「一君は私の恩人なんだよ？ 一人ぼっちだつた私を救つてくれたんだよ？ 忘れたくても忘れられないよ」

「そうか。あの時はそんなつもりなかつたんだけどな」

「一夏にそんな気がなくても、私にひとはつても嬉しかったことなんだよ。だから今までずっと好きだったんだよ」

「そうだったのか。ありがと、俺なんかをずっと好きでいてくれて。そして、これからよろしくな、ウリア」

「うん、よろしく。一夏……いや、一夏

一夏って呼ぶときは思つが伝わつたときつて決めてたんだ。

「ねえ、一夏」

「じつじむつ…」

私は一夏にキスをする。

「私のファーストキスだよ」

「俺もだ」

＾＾＾＾おめでとう（“ゼロコマツ”）、ウリア（スフィール）＾＾＾＾

英霊たちも祝つてくれた。

今日はいい日だよ。



同居（後書き）

「一夏とウコア、あいつとくつつかちやこました」

「一夏と恋人、えへへ……」

「若干ウコアが壊れましたね」

## 勉強（前書き）

前話の『宣戦布告』の最後を修正しました。

S.i.d.e～ウリア～

晴れて一夏と恋人同士になれた次の日。  
朝の食堂で一緒に朝食を取っている。

「ねえねえ、彼が噂の男子だつて～」

「なんでも千冬お姉様の弟らしいわよ

「えー、姉弟揃ってJS操縦者かあ。 やつぱり彼も強いのかな?」

やつぱりここでは男である一夏は田立ちますね。  
こそこそと話の話題にされます。

「一夏、隣いいか?」

「ウリア、別にいいよな?」

一夏が私を気遣ってくれるのは嬉しいですね。  
篠ノ之さんはムツとしてましたけど。

「構いませんよ」

「……では、失礼する」

ムツとしたまま篠ノ之さんは席に着く。

「……一夏、この女は誰だ? やけに親しそうだが……」

あ、もしかして「」の子、「一夏に惚れているんでしょうか？」

「ウリアか？ 前に言ったのを覚えてないか？ 幼稚園のとき元別れた初恋の人だつて」「

一夏、私のことを言つてたりしてたんですね。

「ウリアスファイール・フォン・アインツベルンドす。 よろしくおねがいしますね、篠ノ之箇さん」

「なぜ名前を？」

「一夏に覚えてもらいました」

「せうか。 篠ノ之箇だ。 ジウルジウルよろしく」

手を出されたので握手をします。

「一夏、食べ終わつたら昨日の続きをしますよ」

「おう。 わかった」

今は一夏の勉強が重要ですからね。

「ウリアスファイールよ」

「なんですか？」

「昨日の続きをじうじうつことだ？」

「EISの勉強についてです。一夏、EISに關しては無知ですから、教えておかないといけませんからね」

「やつこつじとか」

しゃべりながらも手は止めてません。

一夏の勉強には少しでも時間が欲しいですからね。

「ウリア、俺は終わつたぞ」

「あ、少し待つてください。すぐに食べますから」

一夏のほうが早く食べ終わつてしまつました。  
私のほうが量は少ないのに。  
しゃべりすぎましたね。

「うわやつせまでした。では、行きますか、一夏」

「ああ。じゃ、またな、算」

「あ、ああ」

私と一夏は並んで教室に向かい、そのまま時間になるまで勉強をしました。

Side～ウリア～out

Side～一夏～

ウリアがわかりやすく教えてくれたおかげで、大分授業についていくよになつた。

たつた一日でここまで覚えるとは、ウリアにひやんとお礼しないとな。

「織斑、お前のHJDが準備までに時間がかかる

「へ？」

「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそうだ」

「マジですか？」

「事実だ」

ウリアの勉強のおかげで、専用機の重要性を覚えたため、俺は驚いた。

- ・ISのコアは全部で467しかなく、それら全では束さんが作ったものであり、しかもブラックボックス化されてあるため、そのため束さんしか作れない。

- ・国とか組織では振り分けられたコアで研究とかを行つている。

- ・コアはアラスカ条約により取引が禁止されている。

こんな感じ。

「本来なら専用機は国家あるいは企業に属する人間しか与えられない。が、お前の場合は状況が状況なので、データ収集を目的とし

て専用機が用意されることになった

「つまり、俺はモルモットってことか」

「悪く言えばな」

専用機か、どんな機体なんだろうか？

「あの、先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者  
なんでしょうか……？」

女子の一人がこの空氣の中でおずおずと千冬姉に質問した。  
……まあ、篠ノ之なんて名字、そうそうないしきつかはバレるよな。

「そうだ。篠ノ之はアイツの妹だ」

千冬姉、教師が個人情報をばらしてどうするんだ。

「ええええーっ！　す、すごい！　このクラス有名人の身内が二人  
もいる！」

「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人！？　やっぱり天才なの！

？」

「篠ノ之さんも天才だったりする！？　今度E.Sの操縦教えてよっ

授業中だといふに篠の元に女子が群がる。  
傍から見れば面白い光景だな。

「あの人は関係ない！」

突然の大声。

「……大声を出してもない。だが、私はあの人じゃない。教えられるようなことは何も無い」

あれ？

篠つて束さんのこと嫌いだっけ？

「さて、授業を始めるぞ。山田先生、号令」

「は、はいっ！」

ま、いつか。

今はISだ、IS。

Side～夏～out

Side～ウリア～

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかつたでしょうけど

お昼休み、また来ましたよ、イギリスの代表候補生。

「一夏とやるには私を倒さないといけないの、覚えてないの？　あなたじゃあ私には勝てない」

代表候補生が相手なら、絶対に負けない。

サーヴァントを使えば何人でも大丈夫。

量産機だとしても、十人くらいなら同時に戦つても勝てる。現に、国家代表三人と同じ機体で戦つて勝ちましたからね。あれは危なかつたんですけど。

「さて、一夏行きましょう。勉強の時間が減ってしまいます」

「おひへ、わうだな」

「お待つかないでーーー！」

「なんですか？ 一夏との時間を邪魔しないでください」

「さて、ウリア行」。勉強の時間が惜しいんだ

「あ、はい」

もう一夏もあの子のことを無視するようです。

掴まるだけ時間の無駄ですしね。

それに、食堂も混んでしまいます。

急ぎましょ。

はい到着。

やつぱり混んですね。

でも、あのまま掴まつていればもっと混んでいたでしょう。

「私は席を取つておるので、料理のまほは任せします

「わかった。何でもいいか？」

「はい。一夏と同じもので構いません」

席がなくなる前に確保しておかないと。  
あ、ありました。

しばらくすると、一夏が来ました。

「はい。鯖の塩焼き定食だつて」

「ありがとうございます、一夏」

「おう。これくらいお安い御用だ」

「ねえ。君って噂の子でしょ？」

三年生の女子生徒が話しかけてきた。

「はあ、たぶん」

「代表候補生の子か企業代表の子と勝負するって聞いたんだけど、  
ほんと?」

「はい、そうですけど」

あ、一夏の隣の席にかけた。  
む、この人、私の一夏に色仕掛けでもする気?

「でも君、素人だよね? IS稼働時間いくつくらい?」

「いくつって……一十分くらいだと思いますけど」

「それじゃあ無理よ。――って稼働時間がものをいつの。相手つて代表候補生か企業代表なんでしょう？　だったら軽く三百時間はやつてるわよ」

私は五百時間はやつてますね。

「でも、私が教えてあげよつか？　――について」

「結構です。俺にはウリアがいますから」

「そうです。一夏には私が教えますから」

「でもあなたも一年生でしょ？　私のほうが上手く教えられると思うなあ」

「大丈夫です。私はこいつ見えても企業代表ですので、知識も技量も問題ありません」

「え？　あなた、自分と戦うかもしれない相手に教えているって言うの？」

「それがなにか？　たかがこれくらいのことが問題でもあるんですか？」

同じクラスなのに、助け合わないでどうするんですか。

そもそも、自分の恋人の手助けをしないわけが無いじゃないですか。

「ですので、結構です」

「そ、そり……」

打ちひしがれて去つて行く三年生。  
一夏は絶対に渡しません。

Side→ウリア→out

## ウリコ・対セシリア（前書き）

そういえば、筆が空氣ですね。

## ウリア対セシリア

Side～ウリア～

月曜日。

イギリスの代表候補生との対決の日。

(シロウ、準備はいいですか?)

>大丈夫だ。君のほうこそ大丈夫なのかね?<

(問題ありません。後は戦うだけです)

>では、行くとじょうく

(ええ)

「では、私は行きますね。一夏は白式の一次移行は終えておいてくださいね。それと、私の戦いをよく見ておいてください。見るだけでも勉強になりますから」

「わかった。絶対に勝てるよ」

「もちろんです。代表候補生に負けるほど、私は弱くありません

よ

(行きますよ、シロウ)

>了解した<

私はサーヴァントを【英靈・H/Mヤシロウ】で展開する。

「それがウリアのISか」

「はい。これがアインツベルンが私のために用意したIS『サー  
ヴァント』です。では、行ってきます」

ビットを飛び立ち、アリーナに飛ぶ。

そこには既にセシリ亞・オルコットがいた。

「来ましたか」

「はい。あなたの鼻をへし折る為に来ました」

「言いますわね……。絶対に見返して見せますわー」

「やれるものならやつてみなさい。アインツベルン家次期当主の  
名において、代表候補生に負けることは赦されない。 ですので、  
私が勝ちます」

『二人とも、準備はいいですか?』

「大丈夫です」

「私もです」

『では、試合開始!』

開始直後に私は『干将・莫耶』を投影する。

「中距離射撃型のわたくしに、近距離格闘装備で戦つ氣ですか……。つぐづくあなたはわたくしを馬鹿にしたいよつですわね」

「これが戦いやすいだけです。 それと、見た目に騙されていては、足元を掬われますよ」

私は両手の夫婦剣を投擲する。

「どーに投げてるんですか?」

「考えがある」とは明白でしょ!っ!」

私が投擲した夫婦剣『干将・莫耶』は互いに引き付け合い、オルコットさんの背後から接近する。

「ブローカン・ファンタズム  
壊れた幻想」

剣が爆発し、オルコットさんが爆風に巻き込まれる。

「剣の形をした爆弾ですか……」

「どう受け取るかはあなたの自由です」

再び『干将・莫耶』を投影する。

「また同じ剣」

「これは爆弾でしょうか? それとも剣でしょうか?」

正解は両方。

エネルギーを籠めた剣を壊れた幻想<sup>ブローカン・ファンタズム</sup>によつて爆発させたんですね。

「っく！」

惱んでますね。

「行きます！」

接近する。

オルコットさんはレーザーライフル《スター・ライトmk?》で撃つてくるが、完璧にではないですが【エミヤシロウ】の力を体現している『サーヴァント』の前では見切れます。

連續で撃たれるレーザーを「ど」とく避け、双剣で斬りかかるが、それは避けられる。

通り過ぎる際に双剣を捨てる。

「壊れた幻想」  
ブローカン・ファンタズム

剣が爆発し、爆風で私は加速して離れ、オルコットさんはまた巻き込まれた。

「厄介な剣ですわね……」

「そもそも第三世代の兵器を出したらどうです？ ブルー・ティアーズの名前の由来である兵装を使わずに負けるつもりですか？」

「だったら、遠慮なく！」

四基の自立機動兵器『ブルー・ティアーズ』を射出する。

四基のブルー・ティアーズ 面倒なのでビットでいいですね  
はオルコットさんの命令を受けて接近し、レーザーを放つてく  
る。

私はそれを全て避ける。  
もうわかりました。

オルコットさんはビットから撃つレーザーは全て背後、真上、真下  
の常人なら反応の遅いところを狙っている。

そして、ビットを操っているときはオルコット自身が動けない。  
ライフルで撃つてはいますが、その場から動けていない。

それに、データで見ましたが、後ビットは一つあるみたいですが、  
それでも余裕ですね。

「なんで当たりませんの！？」

狙いが簡単だからです。  
さて、終わらせましょう。

『干将・莫耶』を投影し、投擲する。  
それを移動しながら行い、アリーナには計五組の『干将・莫耶』が  
舞っている。

「ブローカン・ファンタズム  
壊れた幻想！」

ドオオオンッ！

先ほどまでの爆発とは桁違いの爆発が起こる。

その爆発により、四基のビットは破壊され、オルコットさんはボロ  
ボロになつた。

「あれを受けてまだシールドエネルギーが残つてゐるんですか」

「……ギリギリでしたわ。ティアーズの操作を止めて動いてなければ、あれで負けましたわ」

あれで終わらせるつもりでしたが、動いて爆発の直撃から逃げているとは。

正直言つて、予想外でした。

「これで終わらせましょう

投影したのはただの弓と剣。

この状態で『偽・螺旋剣』カラドボルグ?を使うと大変なことになります。  
だから、ただの剣を矢として放つ。  
エミヤシロウの弓は百発百中。  
ですから、外すわけにはいきません。

「せめて一撃でも！」

レーザーを撃つてきますが、それは避けながら矢を放つ準備を終える。

「これで終わりです」

構えた弓から放たれた矢は見事オルコットさんに当たり、シールドエネルギーが尽きた。

『試合終了。勝者 ウリアスフィール・フォン・アインツベルン』

私は、代表候補生相手に無傷で勝利した。

「アインツベルン、三十分の休憩後に織斑との試合を行つ。準備をしておけ」

準備

「わかりました」

三十分後ですか。

あまり休憩はいらないんですけどね。

「一夏、一次移行は終わりましたか？」

「あと少しだな」

三十分の休憩なんでしょうか。

「こじても、強いな、ウリアは」

「INのHISのおかげでもありますよ。私の『サーヴァント』はかなり特殊ですから」

「やつなのか？　でも、流石だよ」

「あつがとうござります」

やつぱり、一夏といふと落ち着きます。

Side～ウリア～out



## ウリア対セシリア（後書き）

「早く一夏と戦つてみたいですね」

「私は上手く書けるか自信がありません」

「一夏を格好良く書いてくださいね？」

「精一杯頑張ります」

## ウリア対一夏 そして……

Side～ウリア～

「織斑、aignツベルン、そろそろ時間だ」

「「わかりました」」

一夏のHSの一次移行も終わり、私の休憩時間の三十分が終わるうとしていた。

「さて、いい試合をしましょ～ね、一夏」

「ね～。勝てなくとも、一矢報いるべつこなせやつへやるわ」

「では、私だけの力で戦いましょ～」

♪誰の力を使つつもりなのですか？♪

(今回は宝具は使いません。サーヴァントと私自身の力で戦います)

英靈の力を使つには『サーヴァント』の元々の姿を変えるが、今回のHSの試合では、元々の姿で戦いたい。

♪わかりました。ですが、あまり無理をなさらないようこ～

(わかつています)

れて、時間ですね。

「行きましょひへ、『サーヴァント』」

私を纏つのは、先ほどとは違い、雪のよつて真つ白な装甲。これが『サーヴァント』の元々の姿。

「あれ？ もうきのとが違うな」

「私のヒロは特殊でして。この姿が本来の姿になります」

「やうなのか。 んじゃ、戦うか」

「やうですね」

私と一夏は一緒に飛び立ち、アリーナの上空に向かい合ひ。一夏のヒロは『白狼』。

その如の通り、純白の装甲に包まれている。

「一夏、操縦の方は大丈夫ですか？」

「まあな。 一回田でこれだけ動かせるのも、ウリアのおかげだ」

「そうですか。 では、始めましょう」

ブザーが鳴り響き、私と一夏の試合が始まる。

IISから知れる情報から、一夏の持つ武器は、近接特化ブレード『雪片狼型』だというのがわかった。

世界最強の名を持つ千冬さんが現役時代に使っていた《雪片》の後

続武器。

もしも《雪片》の能力をも受け継いでいるのなら、厄介ですね。

「行きまよよ、一夏ー。」

「来い、ウリアー！」

私は両手に黒鍵を持ち、接近する。

ギィィィンー！

私の黒鍵と一夏の雪片がぶつかり合ひ。』

「手数では私のほうが上です。ビリビリ捌きまつか？」

両手の黒鍵は合計で六本。

投擲したりも出来るため、近接戦闘しか出来ない一夏の方が不利だ。

「双剣との戦いも一応はわかつてゐー。」

「私の武器はこれだけじゃないんですよー。」

錆糸で鷹を作り上げる。

「なー?」

「驚いてはいけませんよ、一夏」

鷹を一夏に向けて飛ばす。

これは、I-Sを自動追尾するため、私が操作をしなくても扱える。

だから、私は鋼糸の操作に思考を使わなくて済む。

「私と鋼糸、一つの攻撃をどう捌きます？」

「ちつ！ 厄介だな」

鋼糸の鷹は独立して一夏を狙い、私自身も一夏を狙う。両手の黒鍵と一夏の雪片が幾度もぶつかり合つ。

「隙あります、一夏」

「なに！？」

鋼糸で出来た鷹が鋼糸に戻り、一夏を拘束する。

「その鋼糸は剣でもあるんです。締め付ければ締め付けるほど、シールドエネルギーは削られる。そして、私は自由に動けます」

両手の黒鍵で鋼糸を断ち切らないようにしながら切り裂く。

「ぐつ！ あつさり負けて堪るかあ！」

雪片の刀身が光を帯び、巻きついていた鋼糸を断ち切った。やはり能力も受け継いでいましたか！

私は一夏から距離を取り、黒鍵を投擲する。だが、それは避けられ、防がれる。

「やつと動ける！」

一夏が急接近してくるのを、私は新たな黒鍵を展開して迎え撃つ。

「うおおおおお！」

「はあああああー！」

直進してくる一夏の斬撃を右手の黒鍔三本で逸らし、左手の黒鍔で一夏を斬る。

『試合終了。 勝者 ウリアスフィール・フォン・アインツベルン』

それで一夏のシールドエネルギーが尽き、私の勝利で終わった。

「強いな、ウリアは」

「一夏も一回田とは思えませんでしたよ。まさか鋼糸が断ち切られるとは思いませんでした」

「逆に俺は鋼糸に縛られるとは思わなかつたぜ」

「あの鋼糸は相当な強度があるんですけどね。あれが雪片の力ですか」

「そうだ。《雪片》の特殊能力『零落白夜』の真価は『バリアー

無効化攻撃』。相手のバリア残量に関係なく、それを切り裂き本体に直接ダメージを与えることが出来る。あの鋼糸、エネルギーが籠められていたのだろう?」

「はい。あの鋼糸にはエネルギーを通させて自立追尾を可能にしました」

「零落白夜は斬る対象がエネルギーである限り、それを消滅させる。まあ、エネルギー装備に対しては最強だ」

「そんなに凄いのか」

「だが、当然欠陥もある。あれは自らのシールドエネルギーを攻撃に転化させているのだ。つまり、諸刃の剣だ」

でも、いくらエネルギーに対しては最強だとは言つても、消滅対象が零落白夜の消滅させれるエネルギー以上の攻撃だつたら通用するはずです。

宝具の真名開放ならいくら零落白夜と言えど、消滅させるのは容易ではないだろう。

「なんにしても、今日はこれでおしまいだ。帰つて休め」

では、戻りますか。

「あー、アインツベルン。少し話がある」

「話ですか? わかりました。すみませんが一夏、先に戻つてくれださい」

「俺なら待ってるや？」

「長引くかもしれん。先に戻つておけ」

「といつことらしいです」

「わかった。先に戻つてるからな」

一夏はピチットから出て行き、二つの間にかここには私と千冬さんじかいなくなつた。

「ウリア」

名前？

プライベートみたいですね。

「もしかして、一夏とのことですか？」

「ああ。私はお前と一夏の行動を見ていた。お前ら、付き合つているのか？」

「……はい。私と一夏は付き合つています」

「私はお前の気持ちも、一夏の気持ちも知つてはいた」

千冬さんがドイツ軍で教官をしていたとき、何度もあつて話をしました。

そのときこいつたんですね。

「正直言つて、私はお前たちが繋がつてくれて嬉しい。だがな、

「一夏は私の大事な家族だ」

「それはわかつています」

「一夏と千冬さんは両親に捨てられてしまつていて。  
だから、一夏の唯一の家族なのだ。」

「私を認めさせてみる」

「……どのようにして？」

「RIJはHS学園だ。 言いたいことがわかるか？」

「つまり、HSで戦えと？」

「そうだ。 お前の腕とそのHSの相性は世界最高だ。 その力を  
持つとして、私を倒して見せろ」

私が『サーヴァント』を使ったときのHSの適正値のランクはSS  
Sランク。

つまり、過去最高のSランク保持者である、モンド・グロッソのガ  
アルキリー、ブリュンヒルデ以上のランクである。

HSの適正値に関しては、全世界の頂点である。  
ましてや、『サーヴァント』は伝説の英雄たちの力をも扱うHS。  
英靈たちの力を貸してもらう以上、負けるわけにはいかない。

「わかりました。 日時はいつでしょつか？」

「今週の日曜日だ。 私とて準備が必要だ」

「日曜日ですね？ わかりました

「私が伝えたかったことは以上だ。もう戻つていいだ

「失礼します」

私は千冬さんに一礼し、ペットを後にした。  
相手は千冬さん。

現役時代よりも劣っていると言つても、世界最強であるのは変わらない。

でも、一夏との交際を認めてもらつたため、絶対に負けるわけにはいかない！

Side～ウリア～out

## ウリア対一夏 そして……（後書き）

「オリジナルの英靈を出さうかと考えています」

「オリジナルの英靈及びに宝具のアイディアがあれば、教えてください」と私も作者も助かります」

「必ず出すとは言えませんが、アイディアがあれば教えてください」

「「お願いします」」

## クラス代表決定

Sidē～ウリア～

「オルコットさん、一夏との試合のあつた次の日のS.H.R。

「では、一年一組代表は織斑一夏君に決定です。あ、一繫がりでいい感じですね！」

山田先生は嬉々としてしゃべっているが、一夏だけは暗かった。

「先生、質問です」

「はい、織斑君」

「俺は昨日の試合、ウリアに負けたんですが、なぜクラス代表になつているんでしょうか？」

「それは

「私はオルコットさんと戦いはしましたが、私は誰からの推薦もありませんでしたし、私も立候補はしてないのでクラス代表にはなれないんです」

「しかも、アインツベルンは恐らく学園最強だ。そんな奴がクラス代表になつてみると、他のクラスのやる気が起らる分けなかうつ」

織斑先生が補足説明をしてくれました。

「そういうことらしいです。で、私は全ての試合で勝つているので、私が決めさせてもらいました」

「何で俺にしたんだよ！？ オルコットだつていただろうが！」

「他国をああも簡単に侮辱するような人がクラス代表に相応しいはずないじゃないですか。それに、クラス代表になればISの操縦は他よりも伸びやすいはずですので、一夏にさせてもらいました」

一夏は他よりもスタートが遅い分、少しでも経験が積めたほうがいいんです。

「あ、あのっ！」

声をしたまゝに向くと、オルコットさんが立ち上がっていた。

「一Jの度は織斑一夏さんや日本のことを侮辱してしまい、申し訳ありませんでした！」

頭を下げて謝つきました。

「知りもしないのに男だからといつ理由で、侮辱してしまい申し訳ありませんでした！」

「いや、俺はあんまり気にしてないから。だから頭上げてくれないか？」

「そうです。あの時は私も言い過ぎました。これから改めてくれればそれで構いません」

「一夏のことを悔辱されたからといって、やり過ぎてしましましたし。ですが、後悔はしません。

「しかし… それではわたくしの気が済みませんわ…」

「では、一夏と模擬戦をしてください。私のところは中・遠距離と言つものが少ないですから」

全くないわけではないんですが、多くが近距離戦闘ですからね。マシンガンとか、レーザーといった射撃武器はほとんどありません。』

「一夏もそれでいいですかね？」

「ウリアアがいいのなら、俺も構わないぞ」

「……わかりましたわ。 その役目、務めさせていただきます

これで一件落着ですね。

「クラス代表は織斑一夏。 依存はないな

はーい、と一夏を除くクラスメイトが返事をした。

一夏、私も手伝いますからそんなに落ち込まないでください。

そして日曜日。

私と千冬さんの試合の日になつた。

「来たか、ウリア」

「はい。一夏との交際、認めさせてみせます

『ヒュ』での試合を見る者はいない。私も全力が出せる

「それは私も同じことです。『サーヴァント』の真価を見せてあげます」

今回は英靈たちの力を存分に使うつもりです。  
真名開放を使うために設定しなおしたりもしましたし。

「束に頼んでおいて正解だつたな

「束さんですか？」

「あいつを知つているのか」

「はい。何度か家のほうに来てますし、それにちよくちよく来て

ますか？」

「私を呼んだ〜？」

なぜかここにいる束さん。

それより、相変わらずの変な格好ですね。

機械的なウサミミをつけた、一人不思議な国のアリス的な服装です。それにしても、本当に

「「なんでここにいる（んですか）？」」

千冬さんも疑問のようです。

「酷い〜！ 折角最終チェックしに来たのに〜！」

「やうか。 では、早く頼むぞ」

「任せなさい〜！ この束さんに掛かれぱりょくのちよいだ！」

千冬さんが渡した待機状態のHISのコンソールを開き、高速でチックをし始める束さん。

相変わらずふざけているのに頭はいいですね。

一週回って馬鹿でもありますが。

「ねえウーハちゃん。 今酷いこと考えなかつた？」

なんでわかつたんでしょう？  
エスパーですか？

「……氣のせいです

「今のは何！？」

「相変わらず滅茶苦茶な人だと改めて実感しただけです」

「それって褒めてるの？ それとも貶してるの？」

「両方です」

「酷いっ！」

そんな会話をしながらも作業のペースは変わらない。  
本当に頭はいいですね。

流石自称天才。

「お、ウリア。 いないと思つたりこんなどこにいたのか」

「い、一夏！？ なんでここに…？」

「白式がここだつて教えてくれた」

「おっ！ 久しいね～、いつくん！」

「束さん！？ なんでここに…？」

一夏が驚くのも無理はありませんね。  
だってこの人大絶賛指名手配中の人ですからね。

「ちーちゃんに呼ばれたからだよー。 ウーちゃんと戦うからって」

一夏には黙っていたんですけどね。  
ばいざれぢやいました。

Side～カラ～out

## クラス代表決定（後書き）

「次回はウリア対千冬です」

「一夏との交際を認めてもらつため、絶対に勝ちます！」

「おおっ、やる気が进つてこむーー！」

「千冬さん公認のカップルになつてやるーー！」

## ウリア対千冬！ 交際の行方（前書き）

ウリア対千冬です。

上手く掛けてるかはわかりませんが、どうぞ。

## ウリア対千冬ー 交際の行方

Side~ウリア~

「……今、なんて？」

「私とウリアが戦うんだ」

「なんで！ なんでウリアと千冬姉が戦うんだよ！」

「それは、私と一夏との交際を認めてもらいためです」

「それひどいひつ……」

「私はお前とウリアが付き合つのは嬉しい。 だがな、お前は私の唯一の家族だ。 だからこそ、私は強き者しかお前の相手には認めない」

「とにかくいらっしゃるのです」

「大丈夫なのかよ！」

「安心してください、一夏。 私は、負けるつもりはありませんから」

一夏と別れるなんて、絶対に嫌ですね。

「……わかった。 絶対千冬姉を認めさせてくれよ」

「任せてくれ。」——夏の期待に応えて魅せまわ

「束、もういいか？」

「完璧だよ、ちーちやん！」

「ではやるべ、ウリア」

「はー」

私と千冬さんは各自のヒヒを纏う。

私はサーヴァントを【英靈・アルトリア・ペンドラゴン】で展開する。

「それは……」

「これは私が現役時代に使っていた『暮桜』だ。 束に頼んで第三世代並のスペックに上げてもらつた」

「準備とは」のことでしたか

「こきなり『暮桜を強化してくれ』って言われたときはびっくりしたぜい」

相手は最強であつたときの姿そのもの。一瞬の油断でも命取りですね。

「では、始めまじょー」

私と千冬さんはアリーナ上空に向かい合ひ。

千冬さんの手には、一夏の《雪片式型》の元になつた刀、《雪片》  
が握られている。

私は、アルトリアの武器、不可視の剣を持っている。

『二人とも、準備はいいかな～？』

「大丈夫です」

「始める」

『オッケー！ んじゃ、試合、開始つー！』

開始直後に私は千冬さんに向かつて飛ぶ。

ガギィイイン！

「見えない剣か。 厄介だな」

この剣は、『インビジブル・ニア風王結界』という宝具で剣を覆い、大気を圧縮させて光を屈折させ、剣本来の姿を隠している。

刀身が見えない分、刀剣の長さが掴めないため、剣のリーチがわからなくなっているため、相手が強くても初見の相手なら厄介だ。

「はあああ！」

「くつー！」

「避けるではないか」

アルトリアの直感は未来予知にも近い危機を察知するので、アルト

リアの状態だと、私自身もそれなりに直感が働いている。  
流石に未来予知とまでは行かないが、この直感はとても助かっている。

「さて、その剣の姿を見せてもらおうつか！」

「…」

雪片の刀身が光っている。

あれは『零落白夜』！  
まずい！

「逃がすか！」

「くつ！」

イグニッション・ブースト  
瞬時加速で急接近してきたため、『零落白夜』を不可視の剣で防ぐ。  
そして、『零落白夜』のエネルギー無効化により、『風王結界』の  
風邪が断ち切られ、刀身があらわになる。

私の持つ剣は、黄金に輝き、雪片とぶつかり合っている。

「その剣の長さは見切った。これで惑わされずに済む」

まずいですね……。

千冬さんの剣の腕は達人級で、なおかつIOS操縦者の頂点に立つている人だ。

まだ真名開放がありますが、それでも私が不利です。

› 大丈夫です。落ち着いてやれば、勝機はありますく

(やうですね。弱気になつていたら、認めてもらひたるものも認められません！)

^ その意氣です ^

(行きますよ、アルトリア。私たちの力、見せてあげましょうー。)

^ はいー ^

勝つには真名開放の瞬間を見定めなければなりません。

「！ つふ、いい眼だ。 来い、ウリア！」

「はいー！ これからが本当の戦いですー。」

再び互いの得物でぶつかり合ひ。

“アレ”を放つには一瞬でも時間が必要になる。  
その時間を作る手はある。

だけど、それをやる隙がない。

隙がないなら、自分の手で作ればいい。

「隙だらけだー。」

「いいえ、それは貴女の隙です」

「なにー？」

私は、自ら隙を作りそこへ攻撃を誘導させたのだ。  
だからこそ、反応も出来るし、次への一手に繋げれるー。

「『ストライク・ヒア  
風王鉄槌』！」

剣を覆つていた風を解放し、威力の持つた暴風へと撃ち出す。

「くつ！」

『風王鉄槌』の威力をいなしたが、それでも風により飛ばされ、体勢を崩す。

生まれた大きな隙と時間。

これを逃せば、私の勝ちは無い。

この、最大のチャンスを勝利の為に！

「これが最後の攻撃です！」

不可視の剣から、膨大な光が現れる。

「『J』の攻撃は、一夏との交際を認めてもらひつ為に！  
と別れない為に！だから！」

私は光を放出する剣を頭上に上げる。

「『J』の一撃に、私たちの勝利を約束させる…」

この一撃は、私と一夏の思いを乗せた一撃。

この一撃は、私と私を助けてくれる英靈たちの一撃。

この一撃は、私たちの勝利を約束してくれる一撃！

「いいだろう！ 受けて立つ！」

千冬さんは体勢を立て直し、雪片を構える。

膨大な光による『究極の斬撃』と、あらゆるエネルギーを絶つ『究極の剣戟』がぶつかり合つ。

「……………」

ウリアスフィール・フォン・アインツベルンー』

『究極』の攻撃同士の戦いは、私たちの斬撃の勝利で終わった。

「はあっ、はあっ、はあっ」

私は息も絶え絶えなんだけど、千冬さんはエクスカリバーを受けたため、気絶していた。

そのため、千冬さんは重力に従つて落下していった。

助けなきや。

だけど、身体が重くて速さが出ない。

このままじゃあ千冬さんが！

♪私にお任せを。 我が主よ♪

一瞬サーヴァントが光り、サーヴァントから放たれた光が千冬さんへと向かい、千冬さんが地面に当たる五十センチほどのところで光が晴れ、光から現れた男性が千冬さんを助けた。

「ありがとう、ディルムツド」

彼は、デイルムッド・オディナ。

ケルト神話に出てくる英靈で、“輝く貌”の異名を持つ。

「主よ、彼女は私が連れて行きますので、戻りましょう

「ええ。 そうします」

私とデイルムッドは、ゆっくりとピットへと戻つていった。

「お疲れ、ウリア。 千冬姉は大丈夫なのか？」

「氣絶しているだけだ。 もうしばらくもすれば眼を覚ますはずだ」

「ありがとうございます、デイルムッド」

「では、私はこれで

デイルムッドは光り、サーヴァントへと戻つた。

「ウリア、あの人は？」

「彼は私のサーヴァントに宿る英雄の靈、英靈の一人です。 私の  
IISは、彼らのおかげで装甲の変化などが起こるんです」

「だから姿が変わったのか」

「そうなんです。 にしても、やりすぎてしましましたね……」

認めてもらいたい一心で、無我夢中でつい思いつきつやつてしまい

ました。

死んでしまわないよう、設定しなおして制限を掛けたのですが、まだ威力が高かったようです。

「……んつ」

「ちーちゃんー」

「束、離れり……」

束さんは千冬さん抱きついていました。

「すみません、千冬さん……」

「気に入るなと書つておらうが。まあいい。私は書つていたと

おつ、お前たちの交際を認める

「しかし……」

「「一」」

「やるな、とは言わんが、避妊はしちよ。在学中に妊娠なんて堪つたものではないからな」

「「千冬さん（千冬姉）ー？」」

絶対顔が赤いです……。

た、確かにしたいですけど……。

「うそうそ。 初々しいねえ」

のんきな……。

「まあ、 節度は守れよ」

「わかつてます／＼／＼

「うー、 まだ顔が熱い……。

「では、 私は戻る。 少し疲れた」

「私たちも戻りましょう、 一夏」

「やうだな」

「束さんも帰るよ。 じゃあ、 またね、 ちーちゃん、 いっくん、 ウ  
ーちゃん!」

束さんはどこかに走り去っていった。

「改めて、 ゆうじくね、 一夏」

千冬さん公認になれた。

私の両親にも今度ちゃんと言つておかなきやね!

Jの日は、 私は部屋に戻つてからばぐつすり眠つた。  
千冬さんとの戦いは疲れました。

Sideワリアout

## ウリア対千冬！ 交際の行方（後書き）

ウリアが勝つのは予想できましたよね……。  
才能が欲しい……。

## 一夏の就任パーティー（前書き）

追加設定。

ウリアの誕生日。

6月15日。

これだけ。

また増えるかもしれません、今のところこれだけ。  
設定のほうにも加えておきます。

## 一夏の就任パーティー

S.i.d.e.／ウリア／

「ではこれよりE.Sの基本的な飛行実践を実践してもらひ。 織斑、  
アインツベルン、オルコット。 試しに飛んでみせろ」

四月も下旬になり、本日も千冬義姉さん」と、織斑先生の授業を受けています。

「早くしる。 熟練したE.S操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

あれ？

一夏はまだ展開できていませんね。  
他のことでも考えているのでしょうか？

「よし、飛べ」

ちなみに、私は今は通常形態である。

「何をやっている。 スペック上ではアインツベルンはともかく、  
オルコットのようは出力は上だぞ」

順番で言つと、私、セシリ亞、一夏の順番。  
遅いですね、どうしたのでしょつか？

「大丈夫ですか、一夏？」

「ああ、なんとかな」

急上昇、急停止は最近やり始めた分ですね。  
でも、ちゃんと出来ていたはずなんですが……。

「体調でも悪いのですか？」

「大丈夫だ。もう切り替えたから」

やつぱり何か考えていたようです。

「織斑、アインツベルン、オルコット、急降下と完全停止をやつて  
見せる。目標は地表から10センチだ。アインツベルンは地表  
から3センチだ」

「私だけ差別ですか？  
けど、大丈夫ですけど。」

「私から行きますね」

私は急降下し、地表5ミリの位置で停止した。  
クラスの皆さんから拍手されました。

これくらいできないと、千冬義姉さんに申し訳ありませんしね。

私は続いて降下してきたのはセシリ亞。  
難なくクリアしました。

流石は代表候補生と言つといひですね。

最後は一夏です。  
大丈夫でしょうか……。

『ウリア、大丈夫だ。俺を信じる』

プライベート・チャンネルで一夏から声が聞こえました。  
私、そんなに不安そうな顔してましたか？

「物凄くしてましたよ」

「うなんですか。

でも、心配なのは仕方がないと思つんですね！」

だって一夏が怪我をすると思うと、平常心でいられる自信があります！

「それは威張るようなことではない。そういうときほど平常心でいなければ、一夏に愛想つかされるぞ！」

（話しかけてもないのに、私の心を読まないでください。それと、  
あれは冗談です）

「主よ、気のせいに聞こえないのは気のせいでいいんですね？」

（大丈夫です！ 大怪我でもしたらわかりませんが……）

一夏が大怪我なんてしたら、平常心でいられるほうがおかしいです。  
千冬義姉さんでも取り乱すかもしれません。

「あ、一夏が急降下を始めました。  
よかつた、墜落はしなかったようです。」

「13センチ。まだまだだが、まあいいだろ！」

まだ始めたばかりですからね、大丈夫です。  
一夏は物凄くの見込みが速いですから。

「織斑、武装を展開しろ」

「はい」

一夏は雪片式型を展開する。

「遅い。」  
「0~5秒で出せるようになれ。」

**手厳しいですね。**

「オルゴット、武装を展開しろ」

一秒と経たずに展開、射撃可能まで完了しています。  
流石、と言いたいところですが、

「さすがだな、代表候補生。ただし、そのポーズはやめる。横に向かって銃身を展開させて誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ」

「うごう」となので、少々残念ですね。

「で、ですがこれはわたくしのイメージをまとめるために必要な

L

「直せ。いいな」

「……はい」

千冬義姉さんは人睨みして黙らせます。  
流石ですね。

「オルゴット、近接用の武装を開けろ」

「えつ。あ、はつ、はいつ」

手の中の光はなかなか像を結ばず、ぐるぐると空中をさまよっている。

「くつ……」

「まだか?」

「す、すぐです。ああ、もうつ!『インターセプター』!..」

もうやけくそですね。

初心者用の手段であるため、代表候補生であり、プライドの高いセシリアにとっては相当屈辱的でしょう。

「……何秒かかっている。お前は、実践でも相手に待つてもいいのか?」

「じ、実践では近接の間合いに入らせません!ですから、問題ありませんわ!」

「ほう。アインツベルンとの試合では、宙を舞う剣に手も足も出なかつたように見えたが?あの様でアインツベルンが特攻しても間合いに入らせないと?」

「あ、あれは、その……」

千冬義姉さん、なかなか毒を吐きますね。

「では、見本でも見せてもらおう。 アインツベルン、武装を開け

しろ

「わかりました」

私の手元がほんの一瞬光り、光が晴れた頃には両手に黒鍵が握られている。

そして、それを一瞬で収納し、新たに『』を開く。

また収納し、最後に銃を出す。

『ラピッド・スイッチ』と呼ばれる技術ですね。

「あそこまで速くなれとは言わんが、あれが最も理想的な形だ。よく覚えておくよ!」

ラピッド・スイッチは努力だけじゃあ難しいですよ。  
だって、ラピッド・スイッチの真髄は、多彩な武器を状況に応じて切り替えて戦うことですから。

いくら切替が早くとも、状況判断ができなければ宝の持ち腐れですからね。

でもまあ、覚えておいて損はないんですけど。

「時間だな。 今日の授業はここまでだ

授業が終わりました。

「というわけでっ！ 織斑くんクラス代表決定おめでとうー。」

「おめでとーー。」

クラッカーが乱射される。

皆さん、盛り上がってますね。

ですが、このパーティーの主役の一夏は暗いですけど。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだつたよねー。 同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

相槌打っているのは一組の人ではありませんよね。  
そもそも、クラスの人数を明らかに超えてますし。

「すみません、一夏。 私が出来ればよかつたんですが……」

「気にするな。 僕はウリアのその気持ちだけで嬉しいから。 千  
冬姉倒せる人が代表になっちゃ 駄目だしな」

「一夏、あれはまぐれですよ。 最後の約束された勝利の剣が上手  
く決まつたから、勝てたんですから」

エクスカリバ

「まぐれであつても、それもウリアの実力だぜ」

一夏……。

やつぱり一夏は格好いいです。

「はいはーい、新聞部でーす。話題の新入生、織斑一夏君と、姿を変えるエラを使うアインツベルンさんにインタビューをしに来ましたー！」

一同盛り上がりました。

といふか、私にもですか？

「あ、私は一年の薦薦子。よろしくね。新聞部副部長やってます。はいこれ名刺」

あ、私にもくれました。

とりあえず、画数の多い字ですね。

「ではまず織斑君！ クラス代表になつた感想を、ビハビー。」

「まあ、なんといふか、頑張ります」

「えー。もつといいコメントちよつだいよー。俺に障るとヤケでするぜ、とか！」

久しぶりに聞きましたね、その台詞。

「自分、不器用ですから」

「うわ、前時代的！」

日本の名優を侮辱しますか。

そういうあなたも前時代な台詞を言つたじゃなしですか。

「うへん、じゃあまあ、適当に捏造しておくからいことして

それでいいんですか、新聞部。

「アインツベルンさん、あのHJは何？ 姿が変わるとつい話題です  
が、その真相は？」

まともな質問ですね。

ですが、それには答えられません。

「それには答えることはできません。 企業秘密ですから」

企業秘密を暴露するわけがありません。

といつより、教えたところで真似なんてできませんが。

なぜなら、この『サーヴァント』が使えるのは私だけですし、英靈  
はアインツベルンしか呼べませんから。

「んー気になるけど、仕方がないね。 じゃあ、専用機持ち三人で  
スリーショットでももらいますかね」

写真ですか。

一人邪魔なのがいますが、気にしないようにしましょう。つ。  
きっとクラスの皆が乱入してくると思いますから。

「それじゃあ撮るよー。 35×51÷24は～？」

「え？ エット……」

「74-375ですよ、一夏」

「お、正解！」

「うわー！」

パシャツとシャツターが切られる。  
一夏に抱きついて正解でしたね。  
だって

「なんで全員入ってるんだ？」

本当に私の予想通りに動きましたから。

「あ！ アインツベルンさん、織斑君に抱きついてるー。  
羨ましいー！」

皆さんが騒ぎ出しますが、気にしません。

もつこの際、一夏の彼女が私であるとばらしてしまこましょつ。

「みんなの前で抱きつかなくともいいだろ？」

「一夏は私が嫌いですか？」

「そんなわけないだろ。 ただ、人の目を考えてほしくてだな」

「いいじゃないですか、見せ付ければ。 千冬姉さんからも認め

てもらつていゐるんですから

「でも、よかつたのか？　ばれると厄介だつて言つてただろ？」

「どうせ後々ばれるんです。ちよつといいですし、この際ばらしてしまつたほうが良いかと思つたので」

「やうか？　ウリアがいいのなら、俺も良いくんだけど」

一夏の了承も得ましたので、ばらしちゃこましよう。

「……えつと、織斑君とアインツベルンさんの関係は……？」

「恋人です」

「え？」

「俺とウリアは、恋人同士です」

『　『　『　ええええええええええええええええええ　…?…?…?…?…?』』』

食堂でみんなの絶叫が響きます。

「ちなみに、千冬義姉さん公認です」

『　『　『　ええええええええええええええええ　…?…?…?…?…?』』』

『』

また大絶叫が響く。

耳がキーンとなつました。

「なにを馬鹿騒ぎしているー。」

千冬義姉さんが来ました。  
でも、バッドタイミングです。

「あ、あのー付かぬ事お伺いしますが、織斑君とアインシベルンさんの交際を認めていねつて本当ですか?..」

「なんだ、もひぱりしたのか」

「はー。ーの際ぱりじてしまおつかと」

「せつか。 確かに、認めている」

千冬義姉さんがせつかと、ーの場にいるほとさん人が〇ーと  
なりました。

千冬義姉さんの発言力は大きによつです。

「織斑、アインシベルン、今のうちに戻つておけ。  
逃げておく」とをお勧めする

「そうですね。 では、私たちは部屋に戻ります。 行きまじゅう、

一夏

「ねー。 せうだな」

私と一夏は部屋に戻り、その日はやつす」した。

でも、もしかしたら明日問い合わせられるかもしけませんね。

Side～ウリア～out

## 一夏の就任パーティー（後書き）

「関係ばかりしちゃいましたね」

「一夏に色田を使う人がいたので、ちょうどよかつたのではらしてしまおうと思つたんです」

「本音は？」

「色田を使う人たちに耐えられなくなつてきたので、失意させてあげようかと」

「結構黒いですね。白銀なのに（ボソボソ）」

「何か言つましたか？」

「いいえ、なにも」

## 中国代表候補生登場（前書き）

空氣だつた原作ヒロインを出したい行きたいと思います。  
あまりにも空氣過ぎたので、反省しました……。

## 中国代表候補生登場

Side～ウリア～

「織斑君、AINツベルンさん、あはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

「転校生？ 今時期に？」

今はまだ四月で、この時期に転校生とは珍しいですね。  
このIS学園への転入は条件が厳しく、試験はもちろん、国の推薦がないとできないようになつていて。  
だから、必然的に

「そり、なんでも中国の代表候補生なんだつてさ」

国の代表候補生になる。

一夏と白式のデータ目当てででしょうか？

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら

イギリス代表候補生のセシリア・オルコット。

腰に手を当てたポーズをよくしているのですが、なぜか似合っています。

「このクラスに転入してくるわけではないのだつへ、騒ぐほどいことでもあるまい」

彼女は篠ノ之箇。

IIS開発者の篠ノ之東さんの妹で、一夏の幼馴染です。

「どんなやつなんだろ？」「

「気になるんですか？」

「ん？ ああ、少しば

「……ウリアさんという人がありながら、他所のクラスの転校生に現を抜かす気ですか？」

「一夏、私じゃあ駄目なんですか？」

「違う！ 代表候補生なんだから、どれだけ強いのがが気になつただけだ！」

「……信じますよ？」

「ああ。俺はウリア以外考えられないから」

「一夏……」

「ゴホン。お前ら、こちやつくなーー入っきてのときにしてくれないか？」

「あ、すみません」

「悪い」

ちよつと怒つてますね。

まあ当然ですか。

だつてパーティーのあつた次の日、篠に呼び出されましたから。内容は一夏について。

篠は小学校のときからずっと好きだったようです。一夏は篠には好きな人がいると黙っていましたが、それでも頑張っていたようです。

「ま、相手が誰でも負ける気はないけどな」

その意氣ですよ、一夏。

勝利へのイメージは重要ですからね。

「織斑くんが勝つとクラスのみんなが幸せだよー」

「織斑くん、がんばってね！」

「フリー・パスのためにもね！」

「今のところ専用機を持っているクラスは一組と四組だけだから余裕だよ」

「 その情報、古いよ」

教室の入り口から声が聞こえました。

どちら様でしょうか？

「一組も専用気持ちがクラス代表になつたの。 そう簡単には優勝できないから」

「鈴……？ お前、鈴か？」

一夏、知っているんですか？

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告に来たつてわけ」

「何格好付けてるんだ？ すげえ似合わないぞ」

「んなつ……!? なんてことをいつのよ、アンタはー。」

「誰なんでしょうか？」

とても仲がいいように見えますが……。

「おい」

「なによー?」

バシンツ！

千冬義姉さんの登場です。

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。さつわと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪

魔だ」

「す、すみません……」

千冬義姉さんにビビッていますが、やはり中のいい人みたいですね

……。

「またあとで来るからね！ 逃げないでよ、一夏ー。」

「わざと戻れ」

「は、はいっ！」

彼女は一組に消えていました。

「つていうかアイツ、ISの操縦者だったのか。初めて知った

「い、一夏、彼女は誰なんですか……？」

信じて良いんですね、一夏？  
あの子とは何もないんですね？

「一夏、あの女は誰だ！」

「ウリアさんとはお遊びだったんですか！？」

バシンバシンバシンバシン！

「席に着け、馬鹿者ども！」

千冬義姉さんの出席簿で叩かれました。  
私はそこまで痛くはなかったのですが、手加減してくれたようです。  
でも、気になります。

あの子が誰なのか、あの子とはどういった関係なのかが。

♪ウリアスフィール、彼女が誰であろうと、一夏との繋がりがある  
のです♪

「一夏を信じる。」  
自信を持って

「それがです。主は自信を持っていいのです。」

「一夏の姉に認められているのだ。ならば堂々としておればいいのだ。」

「あの雑種が何をしたとこだ。お前とあいつの関係が崩れる訳があるまい。」

(嘘……ありがとう)

一夏の彼女である私が一夏を信じなくていいとするんですか。堂々としていればいいんです。

「待つてたわよ、一夏。」

お休み、食堂で例の彼女がいた。

「まあ、とりあえずそこをじっくり。食券出せないし、普通に

通行の邪魔だぞ」

「う、うるさいわね。 わかってるわよ」

「のびるわ」

「わ、わかってるわよ！ 大体、アンタを待っていたんでしょうが！ 何で早く来ないのよ！」

話しか聞いていませんが、この子、理不足ですね。

「それにしても久しぶりだな。 ちょうど丸一年ぶりか。 元気にしてたか？」

「げ、元気にしてたわよ。 アンタこそ、たまには怪我病気しなさいよ」

「どうじつ希望だよ、そりや……」

なんてことを考えるんでしょうか、この子は。 怪我や病気になれだなんて。

「一夏、料理が出てきたぞ」

「あちらのほうが空いていますので、そこで食べましょっ」

笄、セシリ亞のおかげで一人の話が途切れました。  
混雜しているのに、すぐにテーブルに付けたのはよかったです。  
これからお弁当でも作ってみましょうか……。

「鈴、いつ日本に帰ってきたんだ？ おばさん元氣か？ いつ代表候補生になつたんだ？」

「質問ばつかしないでよ。 アンタこそ、なに工事使つてゐるのよ。  
－コースで見たときびっくりしたじゃない」

話から察するに、この子は小学校か中学校の頃の友達ですね。

「一夏、そろそろじりじりつ関係か説明してほしいのだが

「そりですわ！ 一夏さん、ウリアさんを裏切るつもりですか？」

「彼女が誰なのかは教えてください」

一夏を信じるとはいいえ、どうじつ関係なのかは気になつてしまひます。

「あ、悪いな。 」いつも幼馴染だ

「幼馴染……？」

私も気になります。  
いつ知り合ったのがが

「あー、えつどだな。 篠が引っ越したのが小四の終わりころだつただろ？ 鈴が転校してきたのが小五の頭だよ。 で、中一の終わリに國に帰つたから、会つのは一年ぶりぐらいだな」

篠と彼女は入れ違いで転校したんですね。

「で、こっちが篠。 ほら、前に話したり？ 小学校からの幼馴染で、俺の通つてた剣道場の娘」

「で、そいつは？」

「彼女はウリア。 前に言つただろ、俺が好きな人だつて  
一夏、そんなこと言つていたんですね。

「ウリアスフイール・フォン・アインツベルンです。 よろしくお願  
いしますね、凰さん」

「アンタがウリアなのね……。 一人は付き合つてゐるの？」

あ、この子も一夏のことが好きだつたですね。

「あー、俺とウリアは付き合つてゐるんだ」

「そう……。 アンタ、ちゃんと想い伝えられたんだ

「ああ」

「よかつたじゃない。 再開できてる」

祝つてくれるんですね。

諦めがついていたのでしようか……？

「私の存在を忘れてしまつては困りますわ。 中国代表候補生、凰  
鈴音さん？」

「……誰？」

「なつー？ わ、わたくしはイギリスの代表候補生、セシリア・オルコットでしてよー？ まさかこ存じないの？」

「うん。 あたし他の国とか興味ないし」

「な、な、なつ……！？」

怒りで顔を赤くするセシリア。

代表ならまだしも、代表候補生全員を覚える人はほとんどいないでしょ！」

「い、い、言ひておきますけど、わたくしあなたのような方には負けませんわ！」

「や。 でも戦つたらあたしが勝つよ。 悪いけど強いもん。 アンタにも負ける気はないわよ」

「私を」存知なんですか？」

「ええ。 アインツベルン家の次期当主だって國の奴らから聞いたわ」

「国ということは、データが目的ですね。  
アインツベルンを敵に回してただで済むはずがありませんのに、馬鹿なことを考えますね。」

「代表候補生に負けません。 アインツベルン家の当主たる者、非凡でなければならないんですね」

当主になるため、代表候補生以上にきつい訓練を色々やってきました

たから。

それに、千冬義姉さんにも勝つたのに、代表候補生に負けません。

「そういえば一夏、アンタ、クラス代表なんだって？」

「おひ、成り行きでな」

「ふーん。絶対に負けないから」

「俺も負ける気なんてねえよ。負けたら教えてくれるウリアに示しがつかない」

一夏は物凄い勢いで成長していますからね。

代表候補生ともまともに戦えるでしょう。

『零落白夜』の扱い方も、少しですが上達していますしね。

クラス対抗戦、いい試合になりそうです。

Side→ウリア→out

## 中国代表候補生登場（後書き）

「この話の原作ヒロインたちもつ吹き切れています。 セシリアに至ってはフラグが立っていないません」

「私と一夏の関係が認められていくことがありますね」

「そうこう」と。 鈴は中学校のとき口告白したけど、断られていたんですね

「だから、清清しかったんですね」

「そうこう」と

## 対抗戦へ向けての模擬戦

Side～ウリア～

「では、今日はセシリアとの模擬戦で」

「わかった」

「わかりましたわ」

「籌は私とやりましょう」

「わかった」

一夏を鍛えるために、今日はセシリアとの模擬戦です。  
ついでに、筹も一緒です。

「では、始めましょう」

全員が工Sを纏う。

今回は通常形態で、近接のみでの模擬戦になります。

「では、よろしく頼むぞ」

「はい。では、始めますよ」

私は投影した一本の黒鍵を放り投げる。

そして、その黒鍵が地に落ちた瞬間、模擬戦が始まる。

サクッ。

黒鍔が落ち、地に刺される。  
模擬戦スタートです。

「はああっ！」

筈は打鉄を纏い、近接用ブレード一本で挑んできます。  
私は、それを左手に持った三本の黒鍔で防ぐ。

「攻撃が軽いですよっ」

右手に持った黒鍔で切りかかるが、当たる寸前で回避された。

「まだまだ！」

「甘いー。」

筈の勢いを殺さず、左の黒鍔で受け流し、右の黒鍔で隙だらけの脇腹を斬る。

「くつー。」

「これは剣道であつて剣道ではありません。剣道のルールに縛られないよつこ」

「いくら筈が剣道で強くとも、勢いに任せすぎでは簡単に対処できます。」

「今度はいつもから行きますー！」

「貴様へん、お疲れ様です」

「やはり強いな、ウリアは」

篝は前までウリアスフイールと呼んでいましたが、ウリアと呼ぶことを許してあります。

「IRSに乗る時間、経験が違いますからね」

様々な武術を会得したりしましたし、私の場合は量より質の訓練でしたから、五百時間ほどでも上達できました。

だつて、IRSを乗り始めて五時間ほどで代表候補生との模擬戦をやり始められましたからね。

三十時間を越えた頃から人数が増えて、一百時間を越えたら代表候補生五人ですよ？

で、四百時間越えたくらいから『サーヴァント』を授かり、『サーヴァント』を使つようになつてからは国家代表レベルと戦うようになりました。

ふと気づいたら國家代表レベルの操縦者三人と同時戦闘なんですか  
ら。

他の代表候補生、国家代表とは練習の密度が違います。

「さて一夏、負けてしましましたね」

頭を切り替えて反省会。

一夏は先ほどの模擬戦は惜しくも負けてしまった。  
セシリ亞も以前よりも強くなっていますね。

「焦りすきなんだよな」

「そうですね。一夏の白式は燃費が悪いんです。零落白夜に瞬時加速、この一つに多くのエネルギーを使用してしまつ

「零落白夜の切り替えがまだ未熟だ」

零落白夜を相手に当たる瞬間だけ発動するのが千冬義姉さんの戦い方。  
それを覚えれば燃費の悪い白式でも十分通用します。

「はい。ですが、成長速度は異常です。もつ零落白夜の切り替えの口シをつかみはじめてますようですからね」

「そうですね。確かに一夏の成長速度は異様なほどにお早いです」

「元よりのセンスだらう。剣道をやっていたときも飲み込みが早かつたからな」

「実物を見たことがあるからだな。完成されたイメージがあるとやりやすいんだ」

「確かにやつですね。イメージは重要ですか？」

英靈・ヒミヤシロウもいました。

『イメージするものは、常に最強の自分だ』と。

「零落白夜の切り替えもですが、後一つ、回避が疎かです。レーザーを避けるより、雪片で受け流すってどうこうことですか。回避しなければ意味ないじゃないですか」

「あー、つー」

「ついにじゃありません。完璧に受け流せるならまだしも、不完全だから地味に削られていくんです。回避が大事だと何度も言えばわかつてくれるんですか！」

「これでもう五回は言つてますよ。

「わ、悪い」

「その台詞何度田でしたっけ？」

「ウリアの教えを何度も破れば気が済むのだ、お前は？」

「すみません……」

「いつの間にか一夏は土下座してました。

「一夏、ちゃんと避けることを忘れないでくださいね。避けることは、攻める」とよりも重要なんですから」

「お、おう、わかった

避けなければ、攻撃する前にやられてしまうかもしれませんしね。  
避けることは本当に大事なんです。  
避ければ不要なダメージも負いませんしね。

「では、今日は終わりにしましょう。休むことも大切なんですか  
ら」

「それは俺も重々承知している」

「一夏、たまにおじいちゃんみたいなこと考えてますしね」

身体のことに関すると一夏はなぜか異様に詳しかったりする。

「やつだぞ、一夏。だから『ジジイへや』と言われるのだ

「ぐう……ー」

「確かに身体は大切にしなければなりませんが、まだ若いのですから少しくらいにはその考え方を改まってみては？」

「俺はこれを変えるつもりはない！ なぜなら、身体を悪くすれば悲しむ人がいるからだ！」

「私たちのことを考えていてのことは嬉しいのですが、ジジイへや

「うぐー。」

私がそつぱつと、一夏は何かに突かれたかのように短い悲鳴を上げた。

「まあ、それも一夏なんですけどね」

「う、ウリアア……」

「さて、皆さん戻りましょ。 身体が冷えてしましますからね」

アリーナを後にし、各自部屋に戻る。

そして、今は一人っきりの時間。

「一夏~」

「つと。 だからいきなり飛びつくな

「だつて一夏成分が足りないんだもん」

「毎回思つんだが、なんだその一夏成分つて」

「一夏成分は一夏成分だよ。 もう~」

はあ~、落ち着く。

「んー、じゃあ、俺もウリア成分つて奴を補給。 なんかそれだけで一日動ける気がしてきた」

一夏も私を抱きしめる。

あ、身体が疼いてきた……。

「一夏……」

「わかつてゐるさ。 シャワー浴びてからな」

「うん」

翌日、一人揃つて遅刻しかけたのは余談です。  
そして、遅れそうになりつつも、クラス対抗戦の相手を見た。  
一夏の一回戦の相手は二組。  
つまり、凰鈴音だった。

Side～ウリア～out

## クラス対抗戦と襲撃

Side(一夏)

試合当日、第一アリー・ナ第一試合。

相手は鈴だ。

アリー・ナは満席で、会場入りできなかつた人もいる。

俺の目の前には鈴がIS『甲龍』を纏つて試合開始を待つてゐる。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

アナウンスに促され、鈴が空中で向き合ひ。

「あんたがどこまでやれるか見てあげるわ」

「油断していると、足元掏われるぞ。ISの操縦にも大分慣れてきたしな」

いぐり生身で強くとも、操作に慣れていなければまともに戦つ」とも出来ない。

ウリアたちとの練習のおかげで、一ヶ月ほどでかなり操縦できる。ウリア曰く、「もう代表候補生とも戦える」らしい。

『それでは両者、試合を開始してください』

俺たちはブザーが切れると同時に動き出す。

ガギインッ!!

展開した雪片と、鈴の持つ異形の青竜刀がぶつかり合ひ。

「思つてたよりもやるじやない」

「これくらいこは序の口だ」

バトンのよつて回される青竜刀《双天牙月》を雪片でいなす。

「本当にやるわね。でも、これならー」

鈴の方アーマーが開き、中心の球体が光つた瞬間、衝撃に殴り飛ばされた。

「今のはジャブだからね

今の一撃で、あれが何なのかは粗方予想できた。  
もう一発来たそれを、雪片で受け流す。

「嘘でしょーー?」

俺の予想は当たつていたみたいだ。

「あれは衝撃砲だろ。しかも、砲弾だけでなく、砲身も見えない

「たつたあれだけで見破るとかどうこうふざけた頭してんのよー」

これも、ウリアとの特訓のおかげだ。

「さて、俺も負けられないんでな。本氣で行かせてもらひやせー」

俺を鍛えてくれる、ウリアのためにもな！

「アンタにあつさつ負けるほど、代表候補生は甘くないわよー！」

「行くぜ、鈴！」

「来なさい、一夏！」

衝撃砲が放たれる前に、俺は加速姿勢に入る。

千冬姉とウリアの試合で千冬姉がやつて見せた瞬時加速。俺はそれを覚え、ひたすら練習してきた。

瞬時加速による急加速。

「はああああっー！」

ズドオオオオンッ！ー！

鈴に俺の刃が届きそうになつた瞬間、突然大きな衝撃がアリーナ全体に走つた。

鈴の衝撃砲ではない。

こんなことできるのは、俺の知る限りウリアの『約束された勝利の剣』だけだ。

だが、そのウリアは今ピットにいるし、そもそもこんなことはしない。

「誰だ？ 俺たちの邪魔をする奴は！」

『一夏、試合は中止よー。すぐにピットに戻つて！』

ステージ中央に熱源。 所属不明のISと断定。 ロックさ

れています。

「ちひー！」

アリーナのシールドを破るほどの攻撃力を持つISが俺を狙っている。

逃げるわけには行かなくなつた。

『一夏ー!』

ウリアの声が聞こえた。

Side～一夏～out

Side～ウリア～

英靈たちが感じていた嫌な予感とはこれのことでしたか！

突如メールが届き、相手は束さん。

内容は、作った無人機が何者かによってクラッキングされ、操作できなくなつたとのこと。

あれは無人機で、束さんが作ったものと言うのがわかつた。

あの束さんに対するクラッキングを成功させると、只者ではありませんね。

♪ウリアスファイール、あれには人の気配が感じられませんく

♪そのメールの内容は本当のよつだく

英靈たちも無人機と言つてゐるので、間違いではないでしょ。

「一夏！ 逃げてください！ 私が止めます！」

『ウリアか！ 僕にやらせてくれー！』 こいつは僕の力で止めて見せるー。』

一夏の声には、覚悟の籠つっていました。

「……わかりました」

「ウリアー！？」

「一夏の覚悟を無視する」とは出来ません。 一夏、聞こえますか？』

『ああ、聞こえてるだ』

「条件があります。 危険だと感じたら、無理矢理にでも止めます。 わかりましたね？」

『わかった！』

アドバイスでもしておきましょ。

『一夏、あれは無人機です。 思いつきついやつでください』

『無人機？ 人が乗つていないのか？』

『はい。 英靈たちがそつといつています。 間違いはないでしょ』

『わかつた。 無人機なら、全力でやれる』

プライベート・チャンネルを終えて、一夏の様子を見る。

「ウリアアよ。 一夏に任せてもよかつたのか？」

「一夏がそう言つたんです。 ちゃんとした覚悟を持った一夏を否定することはしません。 ですが、危ないと思えばすぐに介入しますよ」

「アインツベルン、これを見ろ」

「遮断シールドがレベル4に設定されていますね。 しかも扉も全てロックされています。 面倒なことをしてくれますね」

ですが、私にはサーヴァントと英靈がいます。 遮断シールドがいくら強固でも、それを簡単に破る方法はあります。

「ところで、篝はどうに行くつもりですか？」

篝が走つてどこかに行こうとしていたので、止める。 どうせ、馬鹿なことを考えていたのでしょう。

「一夏の邪魔をしないでください。 私たちここで待つしかないんですね」

「し、しかし！ なぜお前はそんなに落ち着いていられるー。 一夏の恋人であるづーー。」

「確かにそうです。さつきも言つたように、一夏の覚悟を無視することはしたくないんです。それに、AINZELNの次期当主たる者、そう簡単に取り乱しててはその資格はありません。まあ、一夏が大怪我でもしたらわかりませんが」

「AINZELN、縁起でもないことと言つな」

「大丈夫です。一夏は強くなつた。だから、私は信じるだけです」

無事に倒して戻つてくると。  
だけど、警戒だけはしておきます。  
この世に絶対なんてない。  
もしも危険なことになつても、すぐに対応できるよ！」。

(ティルムツド)

♪承知している♪

サーヴァントをすぐに展開し、行動できるように準備をしておいて損はありませんから。

Side～ウリア～out

Side～一夏～

ウリアからの情報で、あれは無人機だとわかつた。ウリアが信じてくれる、だから俺はあれを止める。

「鈴、逃げてもいいんだぜ」

「馬鹿言いなさい。 アンタを置いて逃げるほど、アタシは薄情じやないわよ」

「わうか。 なら、手伝ってくれよ」

「元からそのつもりよ」

鈴がいるなら、多分あれが出来るはずだ。  
それは賭けだが、成功すればその効果は高い。

「さて、あいつを止めるぞ」

アリーナを破つたレーザーが放たれるが、俺はそれを避ける。  
そして、そのレーザーによって晴れた煙の先には、黒い装甲に覆われた『全身装甲』のIASだった。

無人機だから当然といえば当然なのだが、その姿は不気味だった。  
手が異常に長く、全身にスラスターがある。

頭部には剥き出しのセンサー・レンズが不規則に並び、腕には砲門が左右合計四つある。

乱射でもされたら大変なことになるな。  
やられる前にやるか。

『鈴、衝撃砲で援護してくれ。 僕は零落白夜であいつを斬る』

『わかったわ。 わつきの試合で互いに被弾が少ない分、チャンスはあるけど、できるだけ早く片付けなさいよ』

『わかつてゐや。早く終わらせて皆のところに戻らひが』

『さうしましょい』

鈴が衝撃砲で牽制を始め、少しづつ接近して衝撃砲で怯んだところ  
で一気に加速して斬りかかる。

だが、全身に取り付けられているスラスターの出力が高く、俺の間  
合いから逃げられる。

「…」

俺は瞬時加速を使って離脱する。  
相手の反撃があつたからだ。

だが、その反撃は滅茶苦茶で、長い腕をでたらめに振り回して砲撃  
をしてきたのだ。

あの砲撃は危険だ。

だから、避けるしかない。

「なんつづふざけた攻撃だよ……」

流石無人機というところだらう。

人の間接がない分、自由に曲げれる。  
人間には出来ない攻撃方法も出来る。

「……次で落とす」

大体あの無人機のスラスターの出力は読めた。  
まだ抑えているかもしれないが、それでも次で落とす。

「鈴、出来る限りあいつの注意を引いてくれ。 次で決める

「……わかつたわ。 絶対に決めなさいよ」

「ああ」

瞬時加速の準備をしながら、その時が来るのを待つ。  
残っているエネルギーの三割を使っての瞬時加速。  
いつもの瞬時加速とは使う量が違うため、その速度は爆発的に上昇  
するだろ？。

鈴の牽制を見て、相手を観察する。

そして、その時が来た。

溜めていたエネルギーを開放し、たつきとは比べ物にならないほど  
の速度で接近。

そして、最大出力での零落白夜を振り下ろす。

「つねおおおおおおおおつーーー！」

一閃。

振り下ろされた刃は、無人機を一刀両断した。  
無人機の脅威は、こうして去った。

## クラス対抗戦と襲撃（後書き）

「一夏、頑張りましたね」

「格好良かつたです！」

「無人機を一刀両断。格好いいショチュユーニョンだと思つて下さいね、私は」

「あの一夏、とっても格好良かつたです！惚れ直しました！」

「田ヶキラッキラしますよ、この子」

Side～ウリア～

「一夏、お疲れ様です」

「おう

一夏はしつかり勝つて戻つてきました。  
強くなりましたね。

「織斑、凰、お前らは戻つて休め。 アインツベルン、少し話があ  
る。ちょっと来い」

「わかりました」

あの無人機のことですね、きっと。

「話ところのはあの機体についてだ

「あれは束さんが作つた機体のよつです」

「やはりあいつだったのか……」

「ですが、あれは何者かによつてクラッキングされたよつで、操作  
が効かなくなつていたよつです」

「あいつに対してクラッキングだと…？」

「私も信じられません。 束さんは馬鹿ですけど頭はいいですし、その束さんに対してクラッキングなんて真似ができる人なんてそういません。 私は心当たりがないわけではないのですが、それはありえないんですよ」

「その心当たりとやらをいってみる」

「もしかしたら、英靈が関わっているのかもしれません」

「英靈……確かに、アインツベルンに伝わる召喚術による呼び出された英雄の靈、だつたか？」

「はい。 英靈には伝承を具現化した宝具と言つのがあります。

存在するかは知りませんが、操ること特化した宝具なら、束さんでも手に負えない可能性があります。 ただし、英靈の召喚はアインツベルンにしかできないはずなんですが……」

英靈の召喚にはアインツベルンの血が必要です。

それに、召喚の儀式はアインツベルンだけの秘密。

例え流出したとしても、血がなければ召喚はできない。

「英靈か、本当にただのクラッキングだけか、どちらにせよ厄介だな……」

「英靈の場合は特にです。 伝承の人物の能力は、ただでさえ高いのに、宝具なんて持ち出されたらかなりやばいですよ」

「お前の見立てで、相手にできそなのはいるか？」

「その英靈次第です。 相手によつて違う宝具を持ち出します

から

「相手となる英靈次第では、私も、お前でも負けると？」

「はい。 英靈たちの能力を使えば対抗できますが、絶対勝てるとは言い切れません」

「厄介だな……。 あーもういいぞ」

「それでは、失礼します」

私は礼をしてから千冬義姉さんと別れる。  
少し、伝承について調べてみましょう。  
もしそうならば最悪ですが、可能性のある人物がいるかもしませんし。

「厄介なことにならなければいいのですが……」

英靈なんて出てきたら最悪です。  
ただでさえ強いのに、宝具なんて使われたらどうなることか。  
宝具は一つ一つが強力なため、並の実力では歯が立たない。  
しかも、初見では真名がわからないため、どんな宝具を持っているかも予想ができない。  
厄介以外の何者でもない。

「そう言つ君は私たちを使つてているのだがねく

( な、貴方たちは私の味方じゃないですか！ )

「まあそうなのだがねく

^シロウ、ウリアスフイールで遊ぶのは止めなさい^

^たまにはいいであります^ 私とて暇なのだよ^

(すみません、家ならまだしも、ここでは実体化させると面倒です  
ので……)

ドイツの実家ではよく実体化させていたんですけど、ここではそんなことをすれば問題になってしまいます。

英靈を留めておくための制限があるとはいえ、英靈たちの不満が募ればそれは無意味となってしまつ。

(やういえば、なぜ靈体化しないんですか?)

^なんとなくだ^

(それなら私を弄る意味ないですよね?! 精体化すればいいじゃないですか!)

^「冗談だ。別の理由がある^

シロウ、貴方って言つ人は!

^ギルガメッシュはよく精体化してどこかに行っていますが、私はもしもの時に備えて待機しているのです^

ギルガメッシュ……。

貴方という人は……。

「おひたぐ、私までも常に待機させなくともことと思つのだが……」

「貴方の力はウリアスフィールがよく使うのですから、少しは我慢してください」

（どちらかが交代で靈体化すればいいじゃないですか。誰か二人残つてくれれば、私は構いませんよ）

「ディルムツドもいるんですから、最悪その三人で回せば常に一人は残りますから。

「そういうことなら、早速私は靈体化していつく

「あ、シロウ！」

シロウはもう靈体化してどこかに言つたようだつた。  
みんな靈体化して何をしているんでしょうが?  
特にギルガメッシュは。

「我が？」 散歩だが？』

（あ、いたんですね）

「ウリアよ、お前、<sup>オレ</sup>我的ことをどう思つてゐるのだ？」

（よく靈体化してどこかにいつてゐると、さつきアルトリアから聞きました。だから、今もどこかにいつてゐるのかと）

「……まあよい。 散歩でもして、余興になりそうなものがないか探しておるのだく

(御眼鏡に適つたものはあつたんですか? )

「近辺にはなかなかないな」

「サーヴァントよりも一定以上に離れることはできないので、その範囲以上にはいれないのだ。」

(では、近い内にどこか出かけましょ。一時的にといえ、ギルガメッシュの御眼鏡に適つものがあるかもしませんしね)

「それはよいな。必ずだぞ」

(わかつています)

「一夏はベッドの上で寝つ転がっていました。

「千冬姉の話つてなんだつたんだ?」

「お帰り、ウリア」

「一夏はベッドの上で寝つ転がっていました。

「千冬姉の話つてなんだつたんだ?」

「秘密です。機密なので、教えることはできません」

「ふーん、そつか。じゃあいいや」

「あつたり引いてくれるのはありがたいですね。」

「ありがとう」

「なにがですか?」

「俺を信じてくれて」

「……当然じゃないですか。私が一夏を信じなくてどうするんだ  
すか。私は一夏の彼女なんですから」

「ウリア……」

「私は一夏を信じます。だけど、危険なことは止めてくださいね。  
一夏が怪我するのは嫌ですから」

「大丈夫だ、とは言えないな……」

「一夏、それは誓つてくださいよ……」

「守るために自分を犠牲にくらいにしてやるさ」

「一夏、守るために自分を犠牲にしないでください……。一夏に  
死なれたら私は、私は……」

一夏に依存しそぎているのはわかりますが、私は一夏無しでは生き  
れない。

そんな気がして仕方がないんです。

「大丈夫だウリア……。俺は死ぬつもりは毛頭ないから……」

一夏は私を抱きしめた。

自分の存在を感じさせるよつゝ、強く、わかつた。

Side～ウリア～out

## 休日、城にて（前書き）

ふかやさんとのトイティニアを参考にさせていただきました！

## 休日、城にて

Side～ウリア～

六月頭の日曜日。

私は今、日本にある家（城）に来ている。  
一夏は友達の家にいるみたいです。

「ウリア、一夏君とははどうかい？」

「一夏ですか？ 楽しくやっていますが……」

「それなさい。もしも彼がウリアを泣かせるよつな」とをして  
いたら…… フフフフ……」

「駄目ですよ、あなた。 その程度じゃあ。 ウフフフフ……」

私の両親は過保護だ。

かなり重度の。

正直実の娘でもこれは引きます。

「だ、大丈夫ですから、どうか戻ってきてください」

「おひと、つい」

「お父様、お母様、もしも一夏に手を出したら、いへりお一人でも  
私は許しませんからね？」

一夏を亡き者にするのなら、いへりの一人といえど、私は絶対に

許さない。

地獄の果てまで追つて復讐に走るでしょう。

「わかつていい。ウリアに嫌われる」とを、私たちがするわけがないだろ?」

「もうよ、ウリア。私たちはウリアのこと大事に思つてこるのはだから」

娘を思うのはいいのですが、限度といつものがあつてもいいのでは?

「あ、忘れていました。私に用とは?」

「ああ、それが。先日無人機の襲撃についてだ」

「……なぜ知つていいのでしょうか? それは機密なのですが……」

「ウリアのエリ『サーヴァント』の中にいる英靈たちに定期的に連絡をさせるようにしているのだよ」

「……そういうことは最初から教えておいてくれませんか? プライバシーの侵害ですよ?」

「冗談だよ」

「冗談でも止めてください」

「ウリアのプライバートは気になるけど、そんなことをした嫌われるからね。していないよ」

「で、どのよひして?」

「私の召喚した英靈の仕業ですよ」

「お母様の?」

現アインツベルン家当主である母。

母が身近においている英靈は知りませんね。

「卑弥呼、来なさい」

「何ですか、マスター」

「卑弥呼って、あの卑弥呼ですか?」

「ええそつよ。邪馬台國の女王の卑弥呼よ」

美人で、一般的な服を着ている。  
とても卑弥呼には見えない。

「ああ、貴女がマスターの娘さんね?」

「あ、はい。ウリアスフィールです」

「そう、貴女が。マスターに良く似ているわね」

「よく言われます

昔はそうでもなかつたんですけどね。

「さて、卑弥呼の宝具によつて知つたのよ」

「宝具、ですか？ 一体どのよつな……」

「真名は『民衆導く鬼道の神具（八咫鏡）』よ。 能力は過去・現在・未来、知りたい情報を知ることのできる「みきる」

「情報蒐集に特化した宝具ですか」

「ええ。 でも、長時間の使用はできないし、未来の情報を見るのは時間がかかるの」

「魔力不足ですか？」

「そうよ。 八咫鏡は使つているだけで魔力を大量に消費するの。特に未来を見るときはね」

「なるほど、それで無人機のことを知つっていたのですね」

「そういうこと」と

「話を戻そつか。 その無人機、束ちゃんの作ったものなのだろう？」

「そのようです。 束さんからメールが届きましたから」

「その無人機はもともとHSI学園に向けて飛ばされていたんだ」

「え？」

束さん、貴女はなにをしているんですか？

「途中、それは暴走した」

「それですか」

思い出すのは無人機の乱入と一夏の奮闘。

「暴走した瞬間を見たんだけど、あれ、クラッキングによる暴走じゃないわ」

「……とこいつ」とまつまつ……

「そりゃ。『宝具によるものだ』

「しかし、機械を暴走させるなんて、どんな……」

「暴走を始める少し前、笛の音色が聞こえていたんだ」

「笛の、音色？」

「おさらば、その宝具の持ち主は『ハーメルンの笛吹き男』こと、魔法使いマグスだろ？」

ハーメルンの笛吹き男は、ハーメルンの人々の依頼でねずみ退治を行った。

笛の音でねずみを引き付け、残さず川に溺死させ、依頼を成功させた。

だが、人々は報酬を出し済つたため、男の怒りを買い、住民が教会

にいる間に街の子供たちを連れ去つた。

130人の少年少女は男の後ろについていき、洞窟の中に誘い入れられた。

洞窟には中から封印がされ、中に入った男も、子供たちも一度と戻つてこなかつた。

一部、二人の子供が残された伝えられている。

まあ、『ハーメルンの笛吹き男』についてはこんなところかな。

「しかし、機械を音で操る芸当が可能なのでしょうか？」

「可能なのだろう。それが英靈といつ存在であり、宝具といつ逸脱した代物なのだから」

「問題は、どのようにして英靈を召喚したのか、といつことよ」

「アインツベルンから儀式についての情報が漏れたとは考えられない。たとえアインツベルンから儀式についての情報が漏れていることしても、アインツベルンの血が必要になるからほぼ不可能だ」

召喚の儀式にはアインツベルンの血が必要になる。

情報漏れがあるのなら、すぐさま伝わるはず。

血が盗まれたとしても同様に伝わるはず。

なのに、そういった兆しは見られなかつた。

「私のハ咫鏡でも見れなかつたわ。靄がかかつてゐるようで、その英靈と思しき正体、そしてその召喚者の姿は見れなかつたの。私の宝具の力を打ち消す宝具を持つのか、それとも対魔力がAランクを超えているのか」

『Aランクを超える』、つまり、A+ランク以上の英靈は効かない  
ようですね。

「相手の戦力は未知数で、対魔力Aを超える英靈か、八咫鏡の力を  
遮断する宝具を持っているってことよ」

「厄介ですね……」

「卑弥呼の八咫鏡でも見れなかつた以上、ウリアも警戒しておくれよ  
うに。何かあつたら私たちに教えてくれ」

「わかりました。お父様たちも、何かわかれれば教えてください」

「わかっているわ」

一応千冬義姉さんに伝えるだけ伝えておきましょうか。

「私たちからの話は以上だ。ゆつくり休むなり、好きに過ごすと  
いい」

「わかりました」

とりあえず、休みましょう。  
私は自分の部屋へと向かう。

途中、外を見たりしていると、アルトリアとシロウがいい雰囲気だ  
ったり、クーとフェルグスでしたつけ？が戦つてたり、イスカン  
ダルとギルガメッシュがお酒を飲み交わしていたりと、みんな各自  
で何かしていた。

「やがて実体化すると生き物が出来ますね」

アーヴィングは机の端座に着いた。

「たまにまじめのものここですね」

シルベラードは

休日、城にて（後書き）

ハーメルンの笛吹き男は私が考えてみたのですが、なにか指摘があればお願いします。

## 一人の転校生

Side～ウリア～

「ハヅキ社製のがいいかなあ」

「え？ そう？ ハヅキのつてデザインだけって感じしない？」

「そのデザインがいいのー」

「私は性能的に見て//コーレイのがいいかなあ。特にスムーズモデル」

「あー、あれねー。モノはいいけど、高いじやん」

「やつぱりアインツベルン社製かな？」

「でも高いよね」

月曜日の朝、クラス中の女子生徒たちが手にカタログを持つて談笑していました。

私は一夏と別の部屋になりました……。  
うう……、なんで転校生なんて来るかな……。

「やつぱりアインツベルンさんはアインツベルン社製？」

「やつぱりアインツベルンさんはアインツベルン社製？」

「はい。 私のはアインツベルン社製のオリジナルのオーダーメイドですよ」

アインツベルン社はアインツベルンが経営している企業で、私はその企業代表でもあるんです。

ちなみに、アインツベルン社製の製品は国家代表クラスに人気だつたりします。

性能はいいんですが、高いんですよ。

「へー、通りで見たことないはずだね」

「織斑君のは？」

「俺のは特注品だつて。男のスーツがないから、どつかのラボを作つたらしいよ。えーと、もとはイングリッシュ社のストレートアームモデルつて聞いてる」

よく覚えていましたね。

感心しました。

「EIS-スーツは肌表面の微弱な電位差を検知することによって、操縦者の動きをダイレクトに各部位へ伝達、一般的な小口径拳銃の銃弾程度なら完全に受け止めることができます。あ、衝撃は消えませんのであしからず」

すらすら説明したのは山田先生。  
いつもとは違いますね。

へきつげなく酷いことを言つたな

♪ですが、それも仕方がないかと♪

♪確かに。いつもは頼りないのだがなく

(貴方たちも大概ですよ?)

♪わつにえはウリアよ、先ほど見覚えのある奴を見たぞ♪

(見覚えのある? 誰ですか?)

♪銀髪で眼帯の小さい奴だった♪

あの子ですか。

さすがギルガメッシュ。

名前を覚えないとはさすがです。

(わかりました。 ありがとうございます)

あの子のことですから、このクラスになるでしょう。  
なんせ、あの子は千冬義姉さんを異常なほどに尊敬していましたからね。

つて、私が部屋を変えられた理由つて、これですよね?

「諸君、おはよ♪」

「お、おはよ♪やりますー。」

千冬義姉さんです。

私は英靈たちとの会話を中断して意識を切り替える。

「今日からは本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがISを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。各人のISステッジが届くまでは学校指定のものを使うので忘れないようにな。忘れたものは代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらう。それもないものは、まあ下着で構わんだら」

そこは構いましょうよ！

一夏だつているんですよ！？

「では山田先生、ホームルームを」

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！ しかも2名です！」

「ええええええええっ！？」

一人つて、ばらしましょうよ。

あの子はこのクラスにくるとして、もう一人は誰でしょうか？

「失礼します」

「…………」

え？

一人は私の予想通りのあの子でした。

もう一人を見て、クラスが静まり返った。

なぜなら、そのもう一人の子が、男の格好をしていたからです。

「シャルル・テュノアです。フランスからきました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願ひします」

「お、男？」

「はい、これから僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を」

「わや……」

「はー?」

あ、耳を塞いでおきましょう。

「「「わやあああああ　　つー」「」」

皆さん、どこからそんな大きな声が出るんでしょう?

「男子!　一人田の男子!」  
「しかもひのクラス!」  
「美形!　守つてあげたくなる系の!」  
「地球上に生まれてよかつた~~~~!」

皆さん本当に元気ですね。

「あー、騒ぐな。 静かにしら」

「み、皆さんお静かに。 まだ自己紹介が終わってませんからー。」

もう一人の転校生。

彼女は私の特訓の相手でもあった子です。

「……挨拶をしやうか?」

「はい、教官」

やはり千冬義姉さんには素直ですね。

「……ではそう呼ぶな。 もう私は教官ではないし、……ではお前も一般生徒だ。 私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

「ラウラ・ボーデヴィッシュだ」

「……」

もう少しなにか言いましょうよ。  
一夏よりも酷いですよ。

「あ、あの以上……ですか?」

「以上だ」

可愛そりゃ、山田先生。

あ、一夏と田が会いました。

「！ 貴様が」

パシッ。

ラウラは右手を振り上げ、振り下ろす。だが、それは一夏に防がれた。

ラウラは驚いていますね。

まさか防がれるとは思っていなかつたのでしょうか。

「何のつもりだ？」

「私は認めない。 貴様があの人の弟であるなど、認めるものか！」

今度は左手を振り上げて、もう一度振り下ろそうとした。

「止めなさい、ラウラ！」

「！ ウリアスフィール嬢！」

私の声に反応して動きを止めるラウラ。

「止めなさいと言っているの。 わからないの？」

「……わかりました」

ラウラは渋々といった感じで席に座る。

「ではHRを終わる。 各人はすぐに着替えて第一グラウンドに集

會。 今日は一組と合図で工事模擬戦闘を行つ。 解散！」

とつあえず着替えましょ。

「おい織斑。 テュノアの面倒を見てやれ。 同じ男子だろ？」

やつぱりあの子は一夏に任せられましたか。

「ウリアスファイール、少しお話がく

（どうしました、アルトリア？）

「あのシャルル・テュノアといつ男ですが、私と同じ感じがしますく

（……と、いいますと？）

「あの男、性別を偽つているのでは？」

（つまり、あの人は男子ではなく女子だと？）

「はい。 私も性別を偽つていたが故、そう感じるのですく

アルトリアのフルネームは『アルトリア・ベンデラゴン』。  
かの騎士王、アーサー王である。

性別を偽り、王として生きたが故にそつ感じられたのでしょうか。

（アルトリアが言つのですから、間違いないでしょ。 常にシャルル・デュノアを監視しておいてください）

「……御意く

(ハサン、一応ラウリも監視しておこなへだせ)

♪……了解したく

分裂するの早いですね。

このハサンの持つ宝具は『妄想幻像』ザバーニヤ。

多重人格者であったハサンを、個々に分裂させることのできる宝具である。

諜報には持つて来いですね。

シャルル・デュノアが一夏に近づいた理由はおそらく機体データの収集。

だが、なぜ彼女?がやつているのかが不明です。

お母様に調べてもらいましょうか?

それとも直接聞いちゃいましょうか?

ま、それは後にして、今はグラウンドに行きましょう。

叩かれるのはごめんですかうね。

Side～ウリア～out

## 一人の転校生（後書き）

シャル、さつそくばれた！  
英靈なら気づいてもおかしくないですよね？

## 実習（前書き）

ふと気づけばお気に入り登録人数が100人を突破してました。  
こんな作品でも見てくれる人はいるんですね。

S-side～ウリア～

「では、本日から格闘戦及び射撃を含む実践訓練を開始する」

「はい！」

一夏と女子の疑いがあるシャルル・デュノアが到着し、なぜか鈴とセシリアが千冬義姉さんに叩かれていたが、今はラウラとシャルル・デュノアについてだ。

あ、鈴が一夏を蹴りました。

あとでお仕置きしませんとね！

「今日は戦闘を実演してもらおつ。ちょうど活力が溢れんばかりの十代女子もいることだしな。凰！ オルコット！」

「な、なぜわたくしまで…？」

多分鈴のどばつちりです。

あきらめましょう。

「専用機持ちはすぐに始められるからだ。いいから前に出る」

ぶつぶついこながらも前に出る一人。  
千冬義姉さんが怖いんですね。

「お前ら、少しあやの氣をださんか。  
せぬだ？」

全力のウリアとやら

「や、やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「ま、まあ、じ、実力の違いを見せるいい機会よね！」  
専用機持ちの！

?  
千冬義姉さんは何を言つたのでしょうか?

急にやる気になりましたが……。  
しかも何かに怯えて「はるよつな

「そ、それで、相手はどちらに？　わたくしは別に鈴さんとの勝負でも構いませんが？」

「ふふん。」  
「うちのセリフ。」  
「返り討ちよ。」

「慌てるなバカども。」  
対戦相手は

キイイイイイン。  
。

「ああああーっ！ び、ビートべだわーっ！」

一夏に向かって落ちていきます。

一夏とて、やに白式を開いて、その落丁物を受け止めた。

「山田先生、大丈夫ですか？」

む、あの落下物は山田先生だつたんですか……。  
教師ともあろう人が、ISに乗つて落下するとは……。

一夏に何があったらいいあるんですかー

「おこアインツベルン。殺氣を抑える。周りの女子たちが去えてこる」

「……仕方がないませんね」

あとで個人的に殺らせてもらいたい取扱いももらいましたかう。

「で、山田先生はいつも私の一夏にへつらつてこるつまつですか？ 怒りますよー」

「す、すみませんっ…」

謝りながら離れる山田先生。

始めからわざしていればいいんですね、まったくもう。

「（ウリア、安心しない。いやことやらせてやる）

「（ありがとうございます、千冬姉さん）」

千冬姉さんとのアイコンタクト。  
やつぱりわかつてくれてますね。

「わー、わーと始める

「え？ あの二対一で……？」

「いや、わーがにそれは……」

「安心しろ。 今のお前たちなら直ぐに負ける」

負けるといわれたのがよほど悔しいのか、一人は瞳に闘志をたぎらせる。

単純ですね。

「では、はじめ！」

指令と同時にセシリアと鈴が飛翔する。

「手加減はしませんわ！」

「アタシも手加減は無し！」

「い、行きますー！」

山田先生はさつきとは切り替わって田つきが違う。  
なぜ最初からそうではないんですか……。

「さて、今の間に……そうだな。 ちょうどいい。

デュノア、山

田先生が使っているIISの解説をしてみせろ」

「あっ、はい」

「山田先生が使用されているIISは『デュノア社製『ラファール・リヴァイヴ』です。 第二世代最後期の機体ですが、そのスペックは初期第三世代型にも劣らないもので、安定した性能と高い汎用性、豊富な後付け武装が特徴の機体です。 現在配備されている量産型IISの中では最後発でありながら世界第三位のシェア持ち、七力国

でライセンス生産、十二カ国で制式採用されています。特筆すべきはその操縦の簡易性で、それによって操縦者を選ばないことと多様性役割切り替えを両立しています。装備によって格闘・射撃・防御といった全タイプに切り替えが可能で、参加サーブパーティーガが多い事でも知られています」

さすがはデュノア社の人間です。

自社の機体だから、説明はお手の物ですね。

「ああ、いつたんそこまででいい。……終わるぞ」

山田先生の誘導により、鈴とセシリアがぶつかったところにグレネードを投擲。その爆発で勝負が決した。

鈴とセシリアの負けだ。

その二人は醜い言い争いをしている。

「さて、これで諸君にもE.S学園教員の実力は理解できただろう。以後は敬意を持つて接するように。ところで山田先生、もう一戦やれるか?」

「は、はい。あまりダメージを受けなかつたので大丈夫です」

「ということだ。AINZBERN、出て来い」

「はい」

「ふふふ、これで殺れますね……。

「AINZBERN、殺るのはいいが、やり過ぎないよ!」

「字が違いますー。」

「わかつてます」

「無視ですかー？」

山田先生が何か言つてこますが気にしません。

「さて、山田先生、殺りましょー

「だから字が違いますー。」

私は【英靈・ヒリヤシロウ】で展開する。

(やつじゅく、シロウ)

^了解したく

「では、始めー。」

私は《かんしょ干将・莫耶》を投影する。

山田先生はアサルトライフルで撃つてくるが、それは避け、剣で弾く。

「一気に仕留めますー。」

両手の剣を投擲し、さらに投影し投擲の繰り返しで五組の夫婦剣が飛び交う。

私はそちらに投影して接近する。

飛び交う夫婦剣は互いに引き付け合い、交差するように山田先生を切りつける。

山田先生はそれを避け、打ち落とすが、隙を作るのが狙い。打ち落とされた剣は霧散するから爆破しても問題ない。

私は瞬時加速で急接近して斬りつけ、通り過ぎてから後ろへ投擲する。

「壊れた幻想！」  
ブローカン・ファンタズム

山田先生の周りを浮遊していた三組の剣と、先ほど投げた一組の剣が爆発する。

計四組、八本の剣による爆破に巻き込まれた山田先生は落下した。「まあ、これがアインツベルンの企業代表の実力だ。では専用機持ちはアインツベルン、織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィッヒ、凰だな。アインツベルンはボーデヴィッヒとペアでやるようだ。それでは八人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？ では分かれろ」

私はラウラとですか。

「ラウラ、やりますよ」

「了解しました」

ラウラって私にも従順なんですね。

つて、一夏とシャルル・デュノアの周りに女子たちが集まっていますね。  
怒られますよ？

「『』の馬鹿者どもが……。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！ 順番はさつき言つた通り。次にもたつくよつなら今日はエスを背負つてグラウンド百周させるからな！」

鶴の一聲ですね。

あつという間にグループが出来上がりました。  
周りはぼそぼそと話しているが、私たちの班は沈黙している。  
ラウラが原因ですね、きっと。

「ええと、いいですかーみなさん。これから訓練機を一班一体取りに来てください。数は『打鉄』が三機、『リヴァイヴ』が二機です。好きなほうを班で決めてくださいね。あ、早い者勝ちですよー」

山田先生はいつもよりもしつかりしている。  
なぜでしょうか？

「……さて、リヴァイヴと打鉄、どちらがいいですか？」

「えつと、リヴァイヴで」

「それでいいですか？」

「あ、はい」

「では、取りに行きますよ。早い者勝ちですからね。ラウラも行きますよ」

「……了解しました」

『各班長は訓練機の装着を手伝つてあげてください。全員にやらせてもらひるので、設定でフィットティングとパーソナライズは切つてあります。とりあえず午前中は動かすところまでやってみてくださいね』

さて、しっかりやらないと。  
時間内に終わらせずもしあづ。

Side～ウリア～out

若干一夏が壊れた？

S.i.d.e～ウリア～

「では、午前の授業はここまでだ。午後は今日使った訓練機の整備を行うので、各人格納庫で班ごとに集合すること。専用機持ちは訓練機と自機の両方を見るよう！」  
「では解散！」

私たちは余裕を持って行動できました。

これもラウラ効果ですかね。  
ずっとムスッとしている所為か、みんな素早く行動してくれましたよ。

一夏はギリギリだったようで、肩で息をしていました。

「ラウラ、行きますよ」

「はい」

着替えてお昼を食べましょ。

一夏たちはハサンに任せるとして、今はラウラと話をしなければなりませんね。

一夏を敵視しそぎてしますから、少しづつ変えていきませんと。

「ウリアスファイール嬢」

「何ですか？」

「貴女とあの男……織斑一夏とはどのような関係なのでしょうか？」

「一夏との関係ですか？ 恋人ですが」

「…なぜあのよつな男と…」

「ラウラ、あなたが千冬義姉さんを尊敬しているのは知っています。モンド・グロッソ一連覇できなかつたのは確かに一夏が攫われた所為です。 ですが、一夏はそのことをずっと気にしています。一夏は千冬義姉さんに迷惑を掛けるのが嫌で、バイトの命間を縫つては鍛えていたようです」

少しでも千冬義姉さんの負担が減るよつこと、頑張っていたんですね。

「それに、ラウラが千冬義姉さんと会えたのはそれがあつたからです」

一夏の誘拐がどのような真相であつても、それがあつたからこそラウラは千冬義姉さんに会えたのだ。

「しかし…」

「ラウラ、一夏だけを田の敵にしてはいけませんよ。 ラウラが言つてこゐるとは、一夏だけでなく千冬義姉さんをも否定しているんですね」

「ウリアスファイール嬢、それはどうこいつですか？」

「ラウラ、これはあくまで推測ですが、千冬義姉さんがあそこまで強いのは一夏がいたからです」

「…」

「一夏と千冬義姉さんは幼い頃に両親から捨てられているんです。幼いながらも千冬義姉さんは一夏を守るために努力していました。一夏を守るのは自分だけだと、ただ一人の家族としてとても大事にしていたんです」

ちなみに、これは前に千冬義姉さんに聞いたことも混ぜた独自解釈です。

「ですから、今の千冬義姉さんがいるのは一夏がいたからなんですよ。ラウラが一夏のことを認めないのはラウラの自由ですが、すべて一夏が悪いとは思わないでください」

「……わかりました」

わかってくれてよかったです。

あとは一夏とラウラがどのようになるかですね。

「では、お昼ご飯を食べに行きますよ」

私はラウラの手を取つて歩き出す。

「歩けますー自分で歩けますから手を放してくださいーー」

「そうですか。混む前に行きますよ」

きっとシャルル・デュノア田端で混むはずですからね。急がないとお昼が食べれません。

Side～一夏～

ウリアはあのラウラつて奴と一緒に食べるらしいへ、俺たちは屋上で昼食を取っていた。

にして、ウリアとボーネヴィッヒが知り合いだとは思わなかつた。

「一夏とアインヘルンさんってどうこう関係なの？ 実習のときの様子だと、付き合つてこいるの？」

「ああそりだぜ。ウリアと俺は付き合つてゐるだ。多分、俺に向かつて落ちてきた山田先生に怒つていたのだ」

「や、そりなんだ」

シャルルは少し引いているが、ウリアの戦いでも思い出したのだろう。

多量の剣に、襲われ、しかもそれが一気に爆発するとなると結構怖いしな。

剣に囲まれると、爆発もあるから無闇に動けないし、爆発の威力によみがえど、逃げ場無いからな。

「怒ると怖いけど、いつもは優しいぞ」

「へえ、やうなんだ。だけまあまり惚氣ないでね」

「お、おひ、悪い」

俺としては惚氣ていい氣なんて無いんだけどな。  
おいこいら、今バカツプルつて言つた奴出て来い。  
斬つてやるか！」

「にしても、男同士仲良くしようぜ。色々不便もあるだろうが、  
まあ協力してやつていいこひ。 わからぬことがあつたらなんでも  
聞いてくれ。 ただし、HS以外で」

勉強はしているんだが、まだ教える自信は無い。  
そういうえば、シャルルって凄い遠慮深いんだよな。

シャルル争奪戦とばかりに、一年一組には大量の女子たちが押し寄せ  
てきたんだが、このブロンド貴公子、丁寧に丁寧を一乗したよう  
な対応をしていた。

そんなシャルルに、女子たちは恥ずかしくなったのか引き上げてい  
つたんだ。

なんせ、その時に言つたセリフが

『僕のようなののために咲き誇る花の一時を奪つことは出来ませ  
ん。 こうして甘い芳香に包まれているだけで、もつすでに酔つて  
しまいそうなのですから』

これだぜ？

もうなんというか凄いの一言だ。

俺とウリアの関係が公になる前は俺も女子たちにアピールされまく  
つていたのだが、正直面倒でしかなかつた。

俺はシャルルみたいに引き上げさせることなんてできなかつたんだ  
からな。

ただ、ウリアが時々殺氣を出していてくれたおかげで多少は楽だつ  
たんだ。

やっぱりウリアは俺のオアシスだ……！

「ありがとう。一夏つて優しいね」

あの笑顔、本当に男かと思つぽど綺麗だつたぞ。  
これが男の娘つて奴か！

ゾクッ！

今一瞬物凄い寒気が……。

ウリア、これは浮氣なんかじゃないからな！  
俺はウリア一筋だからな！

「どうしたの、一夏？」

あ、なんかシャルルに感づかれた。

「いや、なんでもない。ただ自分の気持ちを改めて実感しただけ  
だ」

「？ 変な一夏」

「ま、これからルームメイトになるだろ？ から、ようしきくな

「うそ、よろしく」

シャルルがくるからウリアと別の部屋になつたんだな、きっと。  
男が増えたのはうれしいが、ウリアと別の部屋になるのは嫌だつた  
な。

ウリアは新しいルームメイトは誰なんだろうか？  
知り合いみたいだったボーデヴィッヒとかな？

ボーテヴィッツヒはウリアに従っていたけど、何かされないか心配だな。

俺をいきなり叩いてくる奴だし、もしかしたら俺との関係を知つてウリアにも何かしでかさないかが心配だ。本当に心配だ。

「一夏、本当に大丈夫？ もうきから変だよ？」

「いや、俺の考えすぎだな、うん。 そうだ、きっとそうだ」

「……何考えてるかなんとなくわかつた気がするよ……」

なにを呆れているかは、まあ今回は田を騒ぐ。今度ウリアと話さなければ！

## アンケート……？

タイトル通り、アンケート……といふか意見が欲しいんです。

ウリアに英靈召喚をせるのですが、いくつか考へてゐるんです。  
そこで、読者の皆さんの意見を聞かせていただきたいのです。

- 1・他の原作に出てくる伝説的な人物をイレギュラーとして召喚する。

- 2・実在する人物を召喚する。

この二つで悩んでいます。

そして、その英靈がどれほど強くしようかも悩んでいます。  
作者である私は、他の作品もそつなんですが、すべて主人公最強・  
チートなんです。

で、今私が考へているのもこれまたチートなんです。  
なので、皆さんの意見が聞きたいんです。

完全にドチート化させるか、このままチートなままか、意見をくだ  
さい。

お願ひします。

ちなみに、期限は一月七日までです。

意見が無かつた場合は多分ドチート化すると思います、はい。

黒兔の宣戦布告とばれた偽装者（前書き）

久しぶりの投稿ですね。  
アンケート、ありがとうございました！  
おかげで決めることができました！

## 黒鬼の宣戦布告とばれた偽装者

S.i.d.e～ウリア～

「はい、わかりました。では」

お父様からの連絡で、誕生日の前日が田曜田なので、その日に継承として英靈召喚をするようです。

初めての英靈召喚で、成功すれば当主になるようです。

ただ、それは名前だけで、本格的な当主としての仕事は卒業してからのようです。

にしても、英靈召喚ですか……。

最初は聖遺物無しでの召喚で、自分と相性のいい英靈が呼び出すようです。

どんな英靈が呼び出されるのでしょうか？

まあ、それはやってみてからのお楽しみですね。

^……主^

ハサンの報告が来ました。

(ハサン、デュノアの様子は?)

♪未だに連絡はしない様子。 やはりデータを送ることに躊躇いを持つているようですね

ということは、デュノアは男装して転入したのは望んでいないんですね。

やはりデュノア社社長の命令でしょうか？

(……では、引き続き監視をお願いします)

♪御意♪

デュノアには常に一人のハサンをつけている。  
これくらいの警戒は必要です。  
もし外道なことをしたら即対応できるように、どこかにいるもある。

「わー、一夏の所に行きましょう！」

最近一緒にいれていませんからねー！

♪ウリアよ、それでも十分一緒にいるはずだぞ？♪

♪シロウ、諦めましょう。ウリアスフィールは一夏にべつたりなのですから♪

♪……そうだな。言つだけ無駄であつたな

アルトリアとシロウが何か言つていて、  
気になつたら気にしませんよ？  
あ、一夏です。

抱きつきましょう。

「一夏～」

「ウリアか。どうした？」

「好きな人に抱きつくるのに、理由が要りますか？」

「いらないな。あ、そういえばウリア、誕生日の前日せびつあるんだ?」

「その日は城に行くことになつていまして……すみません……」

「あーそうなのか。俺は行かない方がいいんだよな?」

「アインツベルンの継承をしなくてはならないので……。悪いんですが、関係者以外に教えないんです……」

「いや、いいや。その日は一緒にいれないけど、誕生日は一緒にいれるんだ。俺だつてウリアの家がどうこうのなのは一応はわかつてゐるからや。何するかは知らないけど、上手くいくといいな」

「いやあさ、その次の日曜にさ、出かけようぜ。誕生日プレゼント、一緒に選ぼうぜ」

「はい」

「はい、そうしましょう」

「一夏とデーター

それに一夏からの初めてのプレゼントです

「織斑一夏、ウリアスフィール嬢」

「」の呼び方と「」の瓶は……

「ラウラですか。 デリしたのですか？」

やつぱりラウラでした。

「織斑一夏、私と戦え」

「……何のためにだ？ 無駄な争いはしたくない」

「言葉では表しにくい。 だが、お前と戦つて確かめたいことがある」

「そうか、わかった。 だが、月末にあれがあるだろ、学年別トーナメント。 どうせならそこで決着をつけようぜ。 模擬戦をしようにもなかなか場所が取れないし、そっちの方が思いつきりやれるだろ？」

確かに、思いつきりやるなら邪魔がいなほつがいいですね。

「……わかった。 だが、私と戦つ前に負ける」とだけは赦さん

「わかつてゐや。 お前にそ負けるなよ」

「ふん、誰に向かつて言つている？ 私を甘く見るな」

「お前にそ俺を甘く見るなよ」

一夏とラウラから火花が迸つているように見えます。

……疲れじゃありませんよね？

「二人とも、いがみ合つてないで鍛えたひじりです~」

「む、そうでした。では、私はこれで」

ラウラは走り去つていった。

「さて、一夏もやりますよ」

「お~、やうだな。ところでウリア、あいつに何か言ったのか?」

「少しですけどね」

「ふーん、そつか」

「じゃあ、ラウラに負けないよう特訓しましょう。ラウラは強いですよ?」

「それでも負けて堪るか。ウリアに教えてもらつている俺が、そういう簡単に負けては示しがつかないからな」

「一緒に頑張りましょう。私も全力で応援しますから」

「ありがとな。ウリアの応援があれば百人力だ」

嬉しいことを言つてくれますね。

「んじや、いつちゅやりますか!」

「その意氣ですよ、一夏」

どちらも頑張ってほしいんですけど、一夏には勝つてほしいですね。

私は出られませんから、一夏の応援を全力でします。

あ、私が出られないのは強過ぎるせいらしいです。

千冬義姉さんにまぐれでも勝つてしましましたからね、仕方が無いですね。

なので、一夏を応援します。

格好いい一夏が見たいですからね！

「　」  
「　」  
「　」  
「　」  
「　」  
「　」

数日後、シャルル・デュノアの正体が一夏にばれました。

私はハサンの報告で知り、一夏の部屋にきました。

「シャルル・デュノア、あなたはやっぱり女だつたんですね」

「気づいてたんだ……。いつから僕が女だつて気づいたのかな？」

「初めからです。あなたの行動もすべて監視していました

「……なら、どうして今まで放置していたの？」

「それはあなたが連絡するのを躊躇っていたからです。現に、今まで一度も『デュノア社』に連絡をしていない」

「ちょっと待ってくれ。俺をおいて話を進めないでくれ。どうしてシャルルは男装していたんだ？」

あ、一夏は知りませんでしたね。私も詳しくは知らないんですが。

「実家からの……『デュノア社』の命令でね」

「『デュノア社』社長からの命令ですか？」

「うん。僕の父がそこの社長なんだ。那人からの直接の命令なんだ」

父親から?

にしても、どこか違和感がある。

「親つて、どうじて……」

「僕はね、愛人の子なんだ」

！ そういふことですか……。

大体わかりました。

「その親はビリュージョウもないほど糞野郎ですね」

「ウリアー！？」

驚いていますね。

まあ、滅多に言いませんからね。

「あなたは利用されているのでしょうか。実の娘なのにもかかわらず、愛人との子だという理由で道具として使っている。そんな奴を糞と言つて何が悪いんです？」

「胸糞悪いですね」

「外道だな」

「まつたくだ

「デュノア社の経営危機になつたために、一夏と白式、アインツベルンのIISのデータを盗んでこいとでも命令されたのでしょうか。それとあなた自身が広告塔となり、同じ男子ならば一夏との接触が容易になる。だから男装して編入してきた。違いますか？」

「うん、そうだよ。アインツベルンさんの言つ通り、僕はあの人の一夏と白式、アインツベルンの謎のIISのデータを盗んでくるようについて言っていたんだ。」

予想通りですね。

「一夏とアインツベルンさんにばれちゃつたし、僕は本国に呼び戻されるだろうね。デュノア社は、まあ潰れるか他企業の傘下に入るか、どの道今までのようにはいかないだろつけど、僕にはひとつもいいことかな」

「あなたはどうするんですか？」

「どうして、どうしようもないよ。ばれるのも時間の問題だし、国に呼ばれれば代表候補生をおひそれて、よくて牢屋行きだよ」

「それでいいんですか？」

「良いも悪いも無いよ。僕には選ぶ権利が無いから、仕方が無いんだよ」

「諦めきっていますね。」

まあ、当然といえば当然ですか。

「どうにかなりませんか？ 彼女が可哀相ですく

（手が無いわけではありません。 時間稼ぎくらいにはなります）

「なあウリア、なんとかならないか？ そんな親に利用されているシャルルがかわいそうだ」

やつぱり、一夏は優しいですね。

あつて間もない人のために手を探しているんですから。

「ありますよ。特記事項第二十一『本学園における生徒はその在学中においてあつとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする』。つまり、少なからず時間稼ぎくらいにはなります。多少は時間が稼げれば、アインツベルンの力で何とかなります」

「……えっと、まず、よく覚えていたね。特記事項つて五十五個もあるのに。それと、アインツベルンさんって家を動かせるの

？」

「現当主……まあ私のお母様なんですが、超がつくほどに過保護なんですよ。もし『私に手を出そうとした』なんて言つたら確実に終わります。それに明日、私は繼承の儀式を行います。当主になればアインツベルンを動かすのは容易です」

私の両親はどちらも超過保護です。

だから『デュノア社がアインツベルンと私に手を出そうとした』なんて言えれば確実に『デュノア社を潰さうとするでしょう』。

「もつとも、決めるのはあなたですけどね」

「えっと、ありがとう、アインツベルンさん」

「私はあなたの親が赦せないだけです」

「ありがとうございます、ウリア。俺一人じゃあ手に負えなかつた

「シャルル・デュノア、一つ言つておきます

ちやんと忠告しておかないとけませんね。

「な、何かな？」

「一夏に色田を使つたりしたらあなたもまとめて潰します。一夏は私だけの彼氏ですからね」

「わ、わかったよ」

一夏は誰にも渡しませんよ、絶対に！

Side→ウリア→out

## 黒兔の宣戦布告とばれた偽装者（後書き）

「最後に違和感を感じている作者です」

「一夏やアルトリアがいなければ無視していましたよ、私は。一夏に近寄る危険性のある相手を助けるなんて、嫌なんです」

「まあ、忠告と名義付けた脅迫をしたので大丈夫でしょう」

「それでもです。あと、私は脅迫はしていません！忠告をしただけです！」

「……やつこいつ」と元気をもじゅつ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2508z/>

IS 銀の姫とサーヴァント

2012年1月5日21時47分発行